# 満洲事変後の総合開発プロジェクトと戦後日本

松浦正孝

じめに

は

一 満洲事変後の総合開発プロジェクト

「大アジア主義者」金子定一の戦前・戦中

三 大アジア主義から総合開発へ

四

日本近現代史における「総合開発」の意味鹿島守之助における総合開発論と汎アジア主義

おわりに 日本近現代史における「総合

はじめに

不可逆的な変化や、「戦争」の終了と「平時」への復帰に伴う「戦後」過程は、その後の「戦後体制」の成立にど 満洲事変以降の日本の戦争に、財界や企業、 個人はどう関わったのか。そして、「戦争」によってもたらされた

hensive development」という政治経済プロジェクトを切り口として、考えたい。 のような影響を与えたのか。 これが、筆者の近年の関心である。本稿では、こうした問いを、 「総合開発 compre-

「総合開発」という言葉を使うが、その前にまず、これと近いと考えられる「開発主義」という言葉を検討する。 本稿では 満洲事変以降の日本帝国における政治経済や外交思潮に影響を与えた特定の歴史現象を分析する際に

視するのか、などで差があるようである。日本でいち早く「開発主義」という言葉を使い、 独裁などの否定的ニュアンスを除去しようとするものもあり、 の産業化のあり方」と規定するものもある(堀金 2004)。 ムを欧米先進国と対比して検討し影響力を持った村上泰亮のように、「レッセフェールには基づかないもうひとつ 国家主導重視か)、 主義的な国家体制をとるなどの含意においては共通しているが、定義の仕方は多様である。 などの概念が使われてきた。中でも、「開発独裁」は、工業化などの経済開発や経済発展を重視し、 析する言葉として、「開発独裁」「開発主義」「開発体制」「developmental state(発展指向型国家・開発主義国家)」 発主義」については、 優先課題として、 一は通常、 経済発展の度合いをどこまで要求するのか、 原材料やエネルギー資源などを発掘・開発するような行為や、それを指向する政策である。 開発経済学や比較政治学において、台湾や香港、アセアン諸国など東アジアの経済発展を分 「通商主義」と対立する概念であると考えられる。主に国家ないしその地域の経済発展を最 成長のパフォーマンスとイデオロギーのどちらを重 国家の関与をどう見るのか (市場メカニズム重視か、 日本の政治経済システ 他の概念の場合には、 独裁的 権威 開

経済活動を通じて、 一開発主義」 国家や市場の満足が最大化されると考える。 の対立軸である 通 商主義」 は 開放的な国際経済システムに信 従って、 国際協調的な政治行動と親和性を持つこ 頼を置き、 自 由 主 的な

本稿が用い る 総合開発」 という概念は、 開 |発主義| と同様、 国際経済システムに信頼性を置くというよりは、

がら、 であ は、 放的な通商システムに対して論理的に排他的であるというわけでは必ずしもない。 自己完結的な経済圏やプロックでの経済発展を目指すことが多いと考えられる。 円ブロック」 ったが、 満洲事変以降から「大東亜戦争」を経て日本の敗戦に至るまで、大アジア主義という心性と深く結びつくもの 国際協調主義と結びつきながら、 |総合開発| の構築を進めつつ、外貨獲得のためそれ以外の地域への輸出を増やそうとしたように、 が必然的に戦争と結びつくわけではない。 いろいろな形で発展していったからである。 敗戦後の日本でも、 また、 しかし、 「総合開発」 本稿で扱う「総合開 九三〇年代 は形を変えな どちらも開 の日 本

その 生 け ことが重要であり、 に 域性も重要な要件である。 11 産活 た生産活動であるが、 Ó 採掘 地域に止まらない経済的な波及効果を生むこともしばしばである。その意味で、 河 勤 Щ のための労働力の移動を含むシステムを準備・設計する。「総合」的で有機的な内容を持った開発である 活動には止まらず、 港湾などを利用した輸送・運輸のシステムを整備するような活動である。 は、 例えば、 その地域内で新たな産業需要が生まれ通商が盛んになるなど思わぬ相乗効果を生むばかりか 市場への移出 政治的には、 電力を創出するために自然環境を開拓して大規模ダムなどを開発 資源を利用した新たな産業開発や通商促進などをもたらす。 ・輸出や加工、 そうした活動を動機づける精神的・ 地域間の分業などを考慮して地域計画 イデオロギー 単に資源を抽 「総合開発」 それは鉱工 的 活動を行うこともある 国土計画を企画し、 Ļ においては、 治 出 業に重点を置 水を行うと共 採掘するだ 広

局などがこれに関与することが多い や実際の結果を以て、 他の体 制に対する優越性を強調する。 が、 それ は、 必ずしも独 私的利益追求の結果として、 裁 官僚制を中心とする国 的 中 央集権的な司令塔によって企 総体的にそうした方向性が 「家機関 地方機関 画 命令さ 植 ħ

とは限らず、

民間の企業や技術者による自由主義的

こうしたイデ

オ i

ギ

ĺ

・と関

わる生産活動は、

雇用

創出

生 一産パ

フォーマンス向

王

民生向

上などの予

Þ

X

その活動自体や活動

0

成果がその国

[や地域

のアイデンティティとなることもある。

治出て

ジェ

クトを、

本稿では

「総合開発」と呼びたい

観的 来ることもある。 全能的な社会観に基づき、 本稿で扱う事例は、 資源・労働力・ そうした側面を持つと考えている。 空間に関する社会設計的・社会工学的な開発を行う政治経 こうした、 人間 の自然や社会に対する楽 ブ

輸力、 密接な関係を持つことが多く、 テ に日々の暮らしや文化、 イ ティを与える活動である。 政治とは、 国家を含む政治経済主体は活動し、 宗教、 労働力、 これら産業の行う経済活動と密接な関係を持つ。 人々に安全保障と活動環境を確保・提供し、 精神修養などといったものを通じてである。「総合開発」の場合には、こうしたアイデンティティと (市場確保のための) 多様な行動を通じてアイデンティティを与えるのは、ナショナリズム、 一方、 また、企業や産業も政治権力と深く結びつく傾向にある。 企画力などが必要である。 経済活動を行う企業や産業には、 政治家や政治団体はカネと票を求めて企業や財界に接近する。 生きるための経済活動や生活の場を整備 これらの確保には政治が必要とされることが 原材料 原材料、 やエネルギー、 資金、 エ 市場、 ーネル ゲギ 労働 į 地域主義、 労の 流 通 確 政治が人々 アイデンテ 保 販 モ を ダニ 求 運

して、 の章は、 分析対象として措定しているのであって、 メリカ、 を通じた経済成長による国力の強化を実現するために、 つて「開発主 では、 (東大社研編 東アジア・ なぜ本稿は、 共同研究の中では恐ろしく座りが悪く、 人や家族あるい 義」につい 東南アジア、 「総合開発」という概念を「開発主義」とは別のものとして立て、これを分析する 、は地 ての共同研究を主宰した末廣昭は、 18)° 域社会ではなく、 しかし、 中東などの途上国に波及し定着した国家主導の政治現象を、 この共同研究は、 明治期日 国家や民族の利害を最優先させ、 W 本における地方の工業化と戦後日本 わば不自然な印象は拭い難 物的人的資源の集中的動員と管理を行う方法、 九 それを、 五〇年代後半から六〇年代初めにかけて、 「開発」という政治的イデオロギーをテコ W 国の特定目標 同 第8章、 0 右 油 予め 化学産業 第9章)。 具体的 開 として定義 には 0 ラテンア 事 の Ĭ 例 か ジェ

クトの

連続性を示唆したい

方や、 するようになったのは ル 対比におい 0 研究では、 むしろここでは、 進歩、 民地 教育水準 て「開発」を検討した件で、 本国による鉱物資源の商品化や経済社会状態向上などに触れていることにこそ、 開 発 この 'n の中身について、 向 九四〇年代末からであるという変化についても触れられている 上に主眼が置か 共同研究がその出発点として、 第二次世界大戦以前は、 一九世紀半ば以降のヨーロッパにおける外からの力による改造という使 れ 経済開発の目標が工業化、 同じ development の訳語である 植民地地 さらに一人当たり物 域 の住民の栄養や衛生状態の改善、 (同、 「発展」という言葉との 的 16-17 注目 生産 量 したい。 一の増大を意味 この モ ラ 共

としてクーデタや戒厳令といった強権支配やテクノクラート官僚と外国資本が論じられるのは、 れに対して本稿では、 が生じた。この共 なくとも日本帝国ではその少し前の一九二○年代からこうした動きが始まり、 同、 開 しかし、本稿で強調するように、 発主義\_ 2章と8章・9章を除く)、その多くの事例の国際環境として国民国家の独立と冷戦が、 」を分析することは、 同研究が、 「総合開発」 国家・ それ自体、 という概念を使うことで、一九三〇年代から一九八〇年代に至る政 第二次世界大戦の前後でこうした変化が起こったという指摘自体は 政府を主要な開発の担い手とする一九五〇年代半ば以降 特定の 「開発主義」を記述することなのである。 一九三〇年代を通じてこうした変化 また、 の途上国に限定し 従って多くの 当然であ 国 |内体制 治経済 誤りで、 の特徴 う章で ブ 口

開 7 イ 日 発 ン ナリズムの ゥ るためでもある。 筆者が を強調し、 実現にも寄与しようとするものである。 ながら、 総合開 中 他面において、 国経済の矛盾を解決しその飛躍的発展を目指し、 帯 発」に着目するのは、 路 ば、 陸の 債務による支配や重要拠点の戦略基地化などの批判を受け、 シル ク 現在地球上を席捲しつつある中 D 1 ŀ それ  $\widehat{\phantom{a}}$ は 帯 と海 面におい のシル て、 「中華民族の偉大な復興」 クロ 周 辺 国 1 地域 の K  $\widehat{\phantom{a}}$ É 帯 路) 域 外 路 0 政 )地域 気策に 沿 0 た 強 との | という超ナシ 摩擦や対立も 地 関 域 協力とウ 心をも

による角逐と調整の時代と見ることもできよう。

球儀を俯瞰する外交」を含め、 引き起こしている。 中国 の一帯一 現代は、「総合開発」を掲げ国家が深く関与する経済パフォーマンス競争の、 路だけではなく、 安倍晋三政権下において経済産業省主導で展開されている 各国 地

洲事変以後に日本帝国が朝鮮・ それでは、 「総合開発」は、 日中戦争を含む満洲事変以降の日本の戦争と戦後とにどう関わったのか。 満洲を中心に進めた帝国内の **、総合開発プロジェクトについて概観しておきたい** まず、 満

# 満洲事変後の総合開発プロジェクト

明らかにしたように、 おける、 ようとした。それは、 と共に、 1933.1.3 の項など)。 の豊富な資源や安価で豊富な電力・労働力・用地、 隣接する朝鮮の統治安定のための好機として利用しようとした。大アジア主義的な思想を持っていた宇垣 い利を活かして、 洲 日本帝国 事変から戦後の高度経済成長までを通観すると、 公共土木事業と国内開発とによって雇用創出と労賃散布とで景気を刺激し、失業者や社会の不満を吸収し 河川改修や清津 0 朝鮮・満洲を中心とする広域にわたる総合開発プロジェクトは、 植民地朝鮮を農業国から工業化、 内地 内地側 一九三一年七月に朝鮮総督として赴任してすぐ、満洲事変に遭遇した宇垣は、これを満洲と ・羅津の築港、 からの外米締め出しの動きに対抗して、 から求められていた朝鮮人労働者の内地流入を抑制するためでもあった。 鉄道建設、 鉄道・港湾などの交通インフラ、 長津江水力発電工事、 さらには商業繁栄へと転換する政策を推進した 宇垣一成・ 朝鮮の産業構造を工業中心のものへと転換する 南 次郎の二代の朝鮮総督時代に大きく進 朝鮮窒素の興南工場建設などが、 重要な画期である。 満洲と隣接するという地理上 すでに筆者が (宇垣 朝鮮北部に その 1970 朝鮮

である。

塚 1966、

55-56)

曹達 業コンビナートやインフラを建設させ、 宇 垣 单 は、 五友禮 重 化学工業化のために経済特区を設け、 昭 和肥 料の 森 理 土木工事を推進 研 0 大河内 安い 正敏ら内 į 電力と労働力と土地とを謳って、 鐘 地 紡や東洋紡などの繊維産業も朝鮮に進出させ、 の新興財閥を積極的に誘致した。 日本窒素 そして、 の野  $\Box$ 重化 遵、 朝 学工 日本

経済を発展させた

(松浦 2010、

第8章、

松浦 2018)。

長津 長津江 た。 江. て蹴上発電所での 39-48)° 三菱から から三〇年にかけて赴戦江での水力発電工事を完成させた。 0 発電 江 永 垣 第一 利 時 の水力発電開発プランを持ち込んでいた。それに基づき、 H |権を 所 野 代に先立ち、 本 発 建設に使う電気設備・プラント類は東芝に発注され、  $\Box$ 0 電 獲得して二六年朝鮮水電株式会社を、二七(昭 0) 主 日 所の運転を開始した。 一要な電力源は当初は火力であったが、 発電を開始して以来水力発電も次第に本格化し、 本窒素コンツェルンに乗り換え、 すでに一九二四 長津江での水力発電工事に際しては、 (大正一三) 年三四 朝鮮工業化の速成のため、 歳 八九二 の土木技師 三三年には長津江水電株式会社を設立し、 和二 野口は二五年に朝鮮総督 年朝 一九五九年頃までは (明治二五) 工事は三六年に完成したという(大場 久保 鮮窒素肥料 朝鮮総督府はその水利権を持ってい 田 年に京都市電 豊 野口らを優遇して高収益を保証 が、 株式会社を設立 日 本窒 「水主火従」 府 が 素 から鴨緑 琵琶 の野 湖 Ļ П 江 疎 遵 であっ 三五 水を利用 支流 K 九二 赴 年から た 0 戦 九 赴 江 (永 た 年 L

B を持ち込んだ 要な電力の消費先として、 13 政 あ \治との関与に強い関心と広い視野を持った電気化学事業経営者との出会い 口を動かした久保田 その 実現のため (久保田 1980, に朝 の動機は、 巨 253-288 額 鮮 の資金提供者として、 へと関心が向 学生であった頃からの、 永塚 1966, かったのである。 100-127)° 電気化学事業の経営者である野口に目を付け、 久保田に 土木、 そして久保田 さらに発電土木への純粋な技師としての 進 路 を開い は、 であった。 たも 水力発 0) は、 電工事を実現するために必 野  $\Box$ 「遵という総合開 自らの 探 プラン

昭を訪問 口と久保田が次に目を向けたのが、 鴨緑江開発を依頼した。 方、 鴨緑江であった。 満洲国においても電源開発を必要としており、 三四年二月、 長津江水電の久保田 実業部臨時 は朝鮮軍司 産業 令官 調 小 査局 国

訪問 の技 江水力発電株式会社という朝鮮 の一九三七 治安などに関して意見交換を行った。そして、 令官と会見し、 年一○月に、関東軍司令官から朝鮮総督に転任した南次郎が、 会社を設立し、 謀長板垣 じ、 国境警備 師安倍孝良が、 征四郎らに、 「鮮満一如」 (昭 (「匪賊討伐」)と密輸防止に関して協議がなされた。 「鮮満一 和一二)年八月、 三六年夏に関東軍から朝鮮軍を通じ野口 上司である実業部鉱工司長椎名悦三郎や産業部次長岸信介、 の象徴として鴨緑江開発がなされることになった。こうしたことの上に、 朝鮮窒素の野口遵に委託するよう進言していたという。 如 の具現方法、 ・満洲双方に跨る会社を同時に設立して水豊発電所建設を始め、 日本窒素の野口遵と技師久保田豊とは、 朝鮮 東條英機関東軍憲兵隊司令官と三橋孝一郎総督府警務局 満州 国 産業経済の不 一遵に長津江水電の久保田豊を送るよう要請した。 満州国図們の日本領事館で後任の植田謙吉関 さらに翌月、 可分関係の強化、 朝鮮鴨緑江水力発電株式会社と満洲 満洲国は三四年一〇月満洲電業株式 松岡洋右満鉄総裁が あるいは関東軍司令官 匪 賊 討伐案」 日中 几 年に第 戦争勃発直 南 などの 南次 朝 長との そして 鮮 総 東 玉 松督 期工 鴨緑 防と 軍 後 を 間

 $\Box$ ムなど水力発電開発事業は、 上記 0 庇護者である宇垣朝鮮総督に対して働きかけられていたという。 久保  $49)^{\circ}$ 岸 のプロ 田 信 の自伝によれ 即ち、 介 セスについ 椎 朝 名悦三郎 鮮 ば、 満洲にわたる未曽有の大規模開発は、 7 ら満洲国官僚の支持を得て成立したものだという評価がなされてい 当時 関東軍司令官を前職とする南朝鮮総督の時代に、 安倍が野口と久保田に持ちかけた揚子江ダム 「アメリカのTVA構想をも超える 出先軍部と官僚制が実現したというのである。 その時点で宇垣がすぐに、 『世紀 0 計画は、 !の大工事』] と言わ 関東軍・ 朝鮮総督府 九三六年夏に久保 朝鮮と満洲 n る た鴨緑 朝 (例えば、 鮮軍 江 田 国とが から 水豊 Ö) 承認 ダ

事を完成した

(広瀬 2003、

, 1-25'

大場 2009、39-50)。

意味をすくい上げ、

九四一年に発電所一号機の運転を開始した鴨緑江水豊発電所は、

経済史におい

て、

「世界史の流れ

の 一

つとし

それを大アジア主義イデオロギーの中に編み込んだのである。

く知る技 に応じて朝鮮と満洲国との合同事業が実現したのだと言う 協力することに積極的なゴーサインを出 共 、同事業を動かそうとした宇垣朝鮮総督の 師 野 口という民間実業家、 さらに彼らのプランの Ļ 連携があったからこそ、 宇垣から後任 0 (久保田 意味を即座に理解して、 南総督にその申し送りがなされたため、 1980, このプロジェ 288-295)° クトは動き出したのだと言えよ 安倍・久保田という現場をよ 植民地を超えた広域 関東軍

う。

発 というよりは、 5 僚、 があるとすれば、 の構想を懐く新興財閥系の技術者や経営者であった。彼らに働きかけられた植民地当局や植民地軍がその これに関連して、 実際には、 H 産 0 鮎 Ш こうした総合開発プロジェクトが始まったのは、 宇垣朝鮮 義 それは 介などの 自民党政治を中心とする戦後日本とは、 総督 「満洲 満 時 洲 組 代 国 の再現であったとする俗説がある の統制官僚というよりはむしろ、 あるいはその前の時期からである。これらの設計図をいち早く現地で描 満鉄調査部、 九三七年に開始された満洲産業開発 野口遵や久保田豊らの朝鮮に進出 (例えば、 岸信介・ 小林 1995 ①②、 椎名悦三郎 2005)° 野 直 しか した総合開 Ŧi. カ年 政治的 W た者

開 て世 発と重 |界的法則として形成され」た電力革命であり、 として位置づけられる(大場 2009、 日 1本海 化学コンビナートという彼ら技術者・ 側 內地 へとつながる環日本海広域経済圏へと結びつけられ、 50)° そのことに間違いはないが、 経営者の現場における総合開 「電力革命と電気化学工業の結合によるコンビ イギリスなど西洋帝国主義に対抗 それだけではない。 発の構想は、 朝 鮮 朝 満洲、 鮮発 ナ ĺ 0 さらには台 -型産 水力電

「アジア人のアジア」という共存共栄イデオロ

ニギー

の核となった。

それを結び合わせたものは、

大アジア

で

た。

その主張は、

今でも根強い

「日本は植民地支配をしたのではない」「良いことをしたのだ」「日本はアジアを

い手は、 解放するために戦争した」「侵略戦争ではない」という考え方につながっている。 子定一に見られるような、 宇垣・ 南系と言われる植民地や中国周縁部に軸足を置いた軍人や植民地官僚らであり、 松井石根を中心とする大亜細亜協会メンバーであった。 大アジア主義の主要な政治 本稿で紹介する金 的 担

確 信を、 としようと考えた。 垣は、 それを通 満洲 宇垣 へと移住させ、 朝 は次第に深めるようになった。 鮮北部 産業の軸とすることでアングロサクソンを南へと駆逐することができるという大アジア主 ・満洲を軸とした広域開発事業により、 日本・ 朝鮮改造による環日本海の結合は、 朝鮮 · 満洲国 一の結合による産業振興によって、 日本海を囲む「アジア」地域の民生を向上させると共 朝鮮人の農民・労働者や日本内 日本海を瀬戸内海のような .地の熟練工 内 鮮 北

本海 内 家具が富 などの植 中 民地を自国経 アジアの文明圏におけるかつての先進国を植民地化したことである。もう一つの経済史的な特色は、 闰 !の自己完結性を著しく高めたことである 日本帝 内海 [市場の多くを失い、 生産性を増大させた。 化 国の 山 ・満洲などの植民地工業化に使われた ·満洲 民地との貿易が飛躍的に増え、 港や伏木港を経由 によって、 済圏の中に取り込むと共に、特に満洲事変以後、 植 の重化学工業基地化に伴い、 民地支配をイギリス・フランスなどの西洋植民地支配と比較した際の大きな特色の一 満洲や台湾が中国から切り離された。 新潟・ 日 して朝 富山・ 本内地で進められた重工業化により生産された機械 鮮 伏木・境港などの日本海側と朝鮮、 ・満洲へと大規模に輸出されるようになる 帝国内の植民地相互の結びつきが強まり、 (竹内 2017、 台湾農業は満洲産の豆粕・大豆・硫安や朝鮮産の (堀 2004、 堀 2004、 2005 しかし日本帝国内ではその結果、 帝国圏域内の工業化と分業関係再編とにより、  $2009)^{\circ}$ 堀 2009、第7章など)。満洲事変によって、 九三四年の高山線全通により飛騨高 満洲とが密接に結び付くことで、 (松浦 帝国内での自己完結性が ・プラント・ 2010, 硫安などの肥料を輸 698-699) 基本材などは 満洲と台湾 つは、 日 1本帝 日本は 日本列 同じ 高 玉 朝鮮 [が植 山 日 朝 東 玉

|松浦 2010

第8章)。

による戦争や侵略などの裏面でもあったが、 島 0 山 奥にも思わ ぬ経済効果が生まれたが、 総合開発がもたらした思いがけない効果であったと言えよう。 そうした事例は少なからずあったと思われる。 このことは、 日 |本帝|

玉

上向 !いた。そして、このような日本経済や日本帝国 三国内の 工業化や新市 場創出などの結果、 日 1本帝 国は の経済発展は、 経済発展の好循環を生み出 西洋植民地との競争関係を意識する植民 植民地を含む 経済や景

く大恐慌 ば鮮総督の宇垣一 を克服 した日本帝国 成だけではなく、 ...の中で台湾がその恩恵を受けていることを強調した。そして、 一九三三年八月から一年間台湾軍司令官を務めた松井石根も、 それが、 日 世 界で 本の · ち 早

の誇る所となったのである

(松浦 2010、

139-140)

治 は 10西洋 :の植 民地支配とは違うという松井の信念にも強く結びついたのである (松浦 2010、 第4章)。

銭高 発電 満 土 建工 化 が進 如 垣 所が進められ、 一業が理 一から朝鮮総督の地位と重化学工業化路線とを引き継いだ南次郎も、 清水 められた。 「内鮮 研 一体」へと進め、工業の地方分散により農工併進を実施しようとした。 江業 大林組、 重化学工業の兵站基地の建設が進行し、 大土木事業には、 0) 下請けとして内地から朝鮮 大倉組といったゼネコンの前身が盛んに参入し、 久保田 豊 の日本工営などの開発コンサルタントや、 ^ の工場移設を請け負うなど、 日本海を隔てた富山・新潟と原 従来の「内鮮融 後に戦後の首相となる田中 中 小様々な業者たちも 南時代には 間 和 料 組 ・製品供給などの を 西 [松組 朝 満 解北 鮮 -角栄 加 鹿 部 体 わ 0 島 0 水力 0 田 た 中

宇垣も南 南 も大アジア主義者であり、 総督 は 宇 垣 時代 の 一心 プライド 田開 発 -の 高 という精 い宇垣 神主 はかつての 義運動をさらに、 部下である松井からの大亜細 錬 成 という形で進 亜協会へ め た (鄭

誘 を体 よく断 0 たが、 松井と親しかった南は喜んで入会した。

満洲国境や朝鮮北部での大規模水力発電や重化学工業化に始まり、

満

洲

国建国と、

朝鮮

督ら植民地当局

が経済的打開策として採用し、

調整していったものであると考えられる。

た帝国 たらし、 れだけで設計したものではなく、 ゃ 「日本海内 日の広域 各植 .海化」 苠 にわたる総合開発は、 地 の を含めた帝国内分業の自己完結的再編成は、 総督府・軍を中心に日本帝国の西洋植民地主義に対する優越性への自信を高めさせた。 民間技師のプランや各植民地に進出した新興財閥などによる企業戦略 企画院や関東軍など、 内 !地や満洲国の革新官僚や軍部とい 広域開発に基づく有機的連環による経済成長をも · う 中 -核的 司令塔がそ こうし

つて欲しい」と言われたという 亜 玉 0 内地からの視察旅行者は先づ朝鮮をよく見、 協会の同 内 強 その後、 !の広域 移 動 開 日 一志である南朝鮮総督を訪ねた際、 強 発戦略と分業強化とを推し進めた。 中戦争解決の見通しの立たない中で、 **监制労働、** 朝鮮から満洲 (松浦 2010、1018-1019、 への移民促進などが停滞すると、 南の口から「大陸策源地としての半島の経営」という言葉を聞 それから満洲国、 すでに三八年一月、 内地の石炭鉱業・金属鉱業・土木建築業などへの 註 . 89)° 次で察哈爾・綏遠、 満洲を拠点に活動していた金子定一 一九三九年夏、 その上で北支とい 朝鮮 総督府 が 朝 動 ふ順 3 が 出 序であ 大 亜 細 帝

名との懇談会で労働問題 不足に対する朝 力者と懇談した。 や関係各官庁と協議すると共に、 ざ羅津 としてのみならず、 理念の下に、 南は、 清津 朝鮮こそは 鮮人労働 雄基の北鮮主要三港を視察した上で清津から新潟への海路を選んで日本に向かった南は、 朝鮮をさらに積 そして朝鮮に戻った南総督は、 内地 「日本帝国 者の ・学生問題における 満洲 内地渡航に関する本府の方針」 極的に動員しようと考えていた。 の要」であるという強い意識を持ち、 日 中国占領地・蒙彊などへの労務供給基地として、「東亜新秩序は内 |本海 側の新潟、 「内鮮 五月二九日に総督府で開かれた臨時道知事会議で、「内 朝鮮 体」を徹底させるための協力を要請し、 人居住者の多い を説明した。 内 地との労務政策調整の 電力業・重化学工業 東京・名古屋 さらに五月三一 大阪 日 ため三九年五 繊 京都 その流れで、 朝鮮各新 維業などの など各方 鮮 聞 地 帝 体 生 から 田 表 産 0 面 玉 わ 労力 基地  $\Box$ 0 政 丽 府 有

務者が

強制

的

13

動させられ

7

W

った。

こうしたい

わ

ゆ移

Ź

強制連行」

と呼ば

れる朝

鮮

人労働

者の

強制的

1移動

労働を実現するために動員され

宮前にお 京城 日 報社 ける排英国民大会は、 長を中心に、 排英国民大会を開くことが決まったのである。 参加者三万人と言われる大規模なもので、 七月二二日の排英大会と共に、 ここから始まっ た六月 <u>Ŧ</u>i. 日 京城 朝

H

本各地

で席巻した大反英運動の震源となり、

雛型となった

内 望する朝 対 鮮人が渡った。 .地に住んでいる朝鮮人は内地へ「同化」させる方針を定めた。 策 英運 の件」を閣 失業者の多 鮮南 動の 部 震源地となった植 シかっ しかし内地側では、 の農民には日本人が移住するには厳しい 議決定した。 た朝鮮から、 これによって、 三民地朝鮮は、 第 朝鮮人の 次世界大戦後の好況で人手不足となった日本内地 朝 流入を規制した。 帝国日本における「人 鮮人の内 環境である朝 地  $\bar{\sim}$ 0) 移動 満洲事変後の一 ば (労働力) 鮮 引き続き抑制すると共に、 北部 満洲 0) 九三四年、 移 動 への 0) 移住先をあてが ^ ٤ 軸であ 日 L本政 職 内 済付は を求 つ た。 地 め 朝 植 0 移 鮮 民 人移住 すでに 地 動 で希 化 0 朝 0)

く日 労働力不足の深刻な日本内地、 人移 れ 確保できなかっ する労務動 る場合にも山奥など厳しい環境を選んだという。 民に期 同 「本人を求めた。 かしながら、 年朝鮮 発することができない満洲国と朝 員 人の移民を扱うために設立された鮮満拓殖株式会社は、 計 たため、 画が 「満州国」 その結果、 立てられ 四二年 建設にあたって満洲の関東軍は日本帝国 た 三六年満洲移民計画で日本内地から二○年間で一○○万戸移住させる方針が定 からは 特に炭鉱や土木建築現場へと、 外村 2011, 「官斡 旋 鮮 11-20)° 総督府の という形で、 その後一九三九年、 しかし、 0 い間で、 「募集」によっては労務 朝鮮 朝鮮から必要な労働力のみを一募集」によって導入 四四年からは 人移民の拡大で合意がなされた。 政府に対 朝鮮人の満洲国 内地における深刻な人手不足のために、 般徴用令によっ Ļ 満洲 この 勤 国 員計 入植を制限  $\sim$ の移民に朝 て、 画 E 必要な労 またこの 0 鮮 人では 入植させ 鮮 年 日本 め

た

0

が、

ギーとが密接に関わっていたことは、

重要である

内鮮 第二部第八章)。 のイデオロギーであり、 労務問題、 人口 排英運動に見られる大アジア主義イデオロギーだったと考えられ 問題と、 日中戦争や排英運動に関わる大アジア主義という対外的イデオ る (松浦

より、 そらく他に例をみない」規模の国民運動(永井2007)であった。一九三九年七月だけをとっても、 た反英運動はすぐに再燃し、 蒋介石援助を打ち切らせていた可能性が高い。 しイギリスの対日譲歩を恐れたアメリカが日米通商航海条約の廃棄通告という牽制を行わなければ、 を主な目標として、イギリスに圧力をかけるために行われたもので、 [民大会は三七八件、 九三九年夏の大阪 165)。この反英運動は、 その後しばらくの間日本国内の反英運動は一時鎮静化した。しかし一度朝鮮総督府を震源として燃え上がっ ・神戸などを中心とする反英運動は、 参加人員はのベ八五万人、 英米を中国陣営の対日包囲網に引き込むという蒋介石の世界戦略 イギリスを日本の対中戦争方針に協力させる宥和の直前まで追い込んだもので、 しかるに、アメリカによるこの行為と独ソ不可侵条約締結の報とに 街頭示威行進に参加したものは四○余万人と言わ 天津租界封鎖に際して行われる有田・クレ 日本国内でも「日本の近代史上におい (鹿 2016) 開催され イギリスに対 ĺ n てもお

は、 デオロギーがあった。 務動員のため まと日本を引きずり込んでいくことになった。 帝国 反英運動がここまで広がったことの根本には、 鮮 総督が 意識を朝鮮植民地内に喚起し、 の新たな段階の労務総動員発動のため、 の大アジア主義精神運動が、その後の日本帝国における大アジア主義的な運動 一九三九年夏、 それに植民地台湾も共振し、 日英の天津租界封鎖問題を機に 帝国臣民としての求心力を高め奮起させようとする精神運動であった。 イギリスなど西洋に優越する大アジア主義とそれに基づく 増幅された波動が内地を鳴動させたのである。 総合開発を中核として植民 「大陸策源地としての朝鮮」 【地朝鮮で形成された大アジア主義 の震源となったのであ で起こした反英運 「内鮮

以下、 このネットワー クの 節 目節 目を担 9 た 人 の大アジア主義者  $\bar{0}$ 戦前 から戦後を紹介する。

# 一「大アジア主義者」金子定一の戦前・戦中

に 政翼賛会興亜総本部大陸局長の金子定一であった。金子の住居は京城府内の三坂通りで(永島 2012)、 辺豊日子 京城商工経済会会頭。 置 眅 (当初 **戦** いたまま、 直 後の ば (元朝鮮総督府学務局長、 朝 「内地人世話会」の名で発足)であった。会長に穂積真六郎 敗戦まで金子は満洲と中国とを往復していた(金子 1958、 鮮 穂積重遠 南 鮮 からの の三男)、 朝鮮重要物資営団理事長)。 引き揚げを目 副会長は久保 指す **一日本人が、** 田 豊 (朝鮮電業・鴨緑江水力電気・ 事 務局長に就任したのが、 共助 連絡 (元朝鮮総督府殖産局長、 168)° のために作 こったの 日窒海南興業等の 陸 軍少将で衆議院議 が、 京城電気会社 「京城 家族を朝 H 社 長 本 人世話 員 大

発って帰国している 朝鮮人保護を説き、 0 た山 九四五年九月一七日に金子は在日鮮人擁護使節として日本へ向かい、  $\Box$ .県の仙崎港から興安丸で釜山に向かい、 様々な情報を集めた。 (金子 1958)。 その後 日本人世話会の活動を続けた後、 ○月二九日に朝鮮人に扮装して、 内地で半島の状況を講演する一方、 家族を伴い 終戦とともに引き揚げ港とな 一二月五 日に 釜 在日 Ш

羊会の 主 親しんで育ったという 新聞記者父定敬を病気で失い、 義にも惹かれていた金子であるが、 金子定一は、 同 一八八五 啄木について政治手腕 (金子 1959、 (明治一八) 自由民権運動家の父が犬養毅と懇意だった関係で、 2-3)° 年岩手県盛岡市加賀野に生まれた陸軍軍人である。 0 九〇二 非凡な野心家・ 盛岡中学で石川啄木の二年後輩だった金子は、 (明治三五) 革命家としての側 年盛岡中学を中退して上京し、 面を書き残している 犬養や彼の支援する金玉 啄木の結成した短 几 昼は力行会で働き、 歳 の時に南 (金子 1967)。 部 歌 均 끮 社 らに [身の 0 夜 会 白

人生は、

自

民権

は

私立

成

城学校に通った

(森 2001)。

その後陸軍士官学校(一九期、

九〇七

(明治四〇)

年卒)

(大正四) 年卒) へ進んだ。 弘前歩兵第三一 連隊 歩兵第三一連隊の朝鮮開城 (将兵は岩手県出身者) 付少尉となって陸軍大学 守備配置に際しては、 (二七期。 一九一二 (大正元) へと進み漢語を学 年入学 Ŧi.

(ソウル)

副官として初めて朝鮮

0) 地

立教法学 ては 支那駐屯軍 を踏んだ 初めての (金子 1958、 (天津軍) 中 国 「勤務であり、 参謀 168)° (司令官補佐。 陸大卒業後は参謀本部を経て、二二(大正一一)年から二六(大正一五)年まで天津 「支那通」である犬養毅からの紹介状を二○通以上携行して赴任したという。 司令官は鈴木一馬から二四年に吉岡顕作中将に交代)となった。金子にとっ

した。このため、「シナ班」から天津軍に対しては、 あった金子は病中の司令官に代わって専断し、 就任したのである。 その後二四年九月第二次奉直戦争 (俗称「シナ班」) 安直戦争敗北以来天津租界に身を置いていた段祺瑞が、 由 当初金子の主要任務は国家総動員のための「支那資源調査」であったが、 が、 運動家で「支那通」、 米英寄りとなった曹錕や呉佩孚を支持するのを差し置いて、 (奉天派の張作霖が呉佩孚を破る) アジア主義者として知られる犬養毅との関係から始まったと言って良い。 北京政府顧問坂西利八郎陸軍中将以下の佐々木到一ら現地の 中傷や妨害が加えられたと言う。 張作霖と馮玉祥に擁立される形で、 が起き、 馮玉祥が北京政変を起こした。 段祺瑞ら親日 金子の専行は、 天津軍ナンバ 臨時 派にテコ入れ 彼が後 政府執 一支那 l 2 で その 口

子は、 二八 中 (昭 国 和三 在 勤時代の金子の行動を見ていると、 年第三師団 (名古屋)参謀となり、 中国勤i 五月第三次山東出兵のための済南動員に従った 務の長い 一支那 通」(「シナ班」)としての立場とは違

顧した所では、

親日派

への心情的同一化による行動であった

(金子 1959、特に 76-88)。

この後参謀本部に戻

むしろ心情的に親日派にコミットする「大アジア主義」 の芽が出てきているように思われる。

連隊区司令官となる。 九三二 年歩兵第八○連隊 歩兵第八○連隊付時代に勃発した満洲事変に際して、 (大邱) 付、三二年第二○師 団司令部 関東軍朝鮮軍連絡参謀として奉天に急 龍 Щ 付 を経 て、 金子は 兀 年

げる。 朝 金子 海 実現することになる金沢支部設立に向けて奔走した なしに朝鮮軍 行した金子は、 解半島と目 国 側 の金沢における連隊長時代は、 金子は、 朝 周 鮮に 年に 団 罰 本 勤 令部付陸軍 行 を越境させる行動を、 大亜 海側とを結びつける役割を率先して果たした。 朝鮮軍に即時 務 わ した時 n た大亜 細亜協会の組織化におい 0 大佐時代の三四年三月に設立し、 朝 褔 一鮮総督は宇垣一 出兵を要請した。 亜協会の設立に伴って会員となった金子は、 金子が 関東軍と朝鮮軍との連絡役として促進したのである。 「朝鮮通」「大アジア主義者」として完成した時期と見ることができる。 成であ て、 石原莞爾らの 宇垣・ ŋ (松浦 南 宇垣 さらに金沢連隊区司令官時代には、 ||両朝 2010, 時 満洲事変を援護すべく、 そして金子のキャリアはこの後も、 鮮総督の 代に植民地朝鮮、 658-659 · 698)° 主導した その朝鮮支部である朝鮮 満洲事変後 そして日本帝! 「日本海湖水化」 司令官林銑 三三年三月 0 朝鮮勤 国は大きな転換を遂 一九三六年一 半郎 帝国 構想 大亜 が 務及び、 天皇 日 転 Ō 換 通 〇月に 後 協 満 0) 0) H 本 朝 玉

今村 井石 治手腕もあって、 機と並ぶ 金子の陸士一九期 根 [からも参謀本部勤務以来終始親しく目をかけられていた金子は 河辺や東條英機、 「三秀才」になると期待されていた その後 0 同 本間 の陸軍内での大いなる活躍が期待されていたはずである 期には今村均・河辺正三・喜多誠一・ 雅 晴 岡 部· 直三郎らがい (小野寺 2009、37-38)。 「支那通」として有名な大亜細 た。 岩手出身の陸軍軍人として金子は 田 中静壱・ (金子 1958、 塚田攻らがおり、 120-126 陸大二七 金子 1959、 板 垣 亜協会会頭 征 期 加 0) 同 東 期 13 0) 松 は

鮮と満洲とをつなぐ役割に捧げられることになるのである。

素大川 岩 は に金子は、 周明とあまりに親密な交際をしていたことが、 憲 兵隊に 三六年 拘束されている金子のために金沢まで赴き、 の二・二六事件後、 事件との関係を疑われて予備役に編入される その原因だったと言われる また東京に行って弁明した。 (八木 1953、 (松浦 同 66-67)° 2010 郷 0 板 予 垣 8章 征 役 几 郎 0 平 関

満洲からやはり金子の無実を晴らすため尽力したが力及ばなかった。

東

軍参謀長も、

間もなく担当の

憲兵隊

長

が岩

手県士 おそらく板垣征四郎参謀長や今村均参謀副長ら関東軍の同郷の友人らの誘いで、 金子 1954 ③、 沪 出 身の中佐に代わると「無実の罪」であることが証明されたが、時すでに遅しであった 44-48, 48-54)。その政治性故に、 金子の軍人としての前途は断たれたのである。そして金子 満洲に渡ったと推察される。 (金子 1952 (2)

当初の満州国 を、 昭 て東條英機に対抗したとして、 まさみち) 金子は 0 鮮満は総裁、 た。 満拓殖株式会社の満洲国側の法人として三八年に設立されたもので、 ないが、 和会は、 当時師団長会議のため東京に滞在していた盟友の今村均関東軍参謀副長に一任し、その結果出馬することにな 宇垣時代から始まった朝鮮から満洲への移民を奨励・統制すべく、宇垣の提唱により一九三六年に設立された 九三七年三月の林銑十郎内閣による第二○回総選挙(「食い逃げ解散」)に際して、 そして、 (発起人の一人) 満洲事変を計画した石原莞爾について、 と名乗った。 金子は一 満洲新京に 0 満鮮は理事長)を務めていた(波形他監 2002、12-25。李炯植氏のご教示による)。 移民政策は、 財界の平 時、 東次郎と表記されることもある。盛岡藩家老、 いた協和会副部長の金子を岩手二区から出馬させようとした。 (国立国会図書館ホームページ「南部次郎」、 満鮮拓殖株式会社顧問として朝鮮から満洲への移住を援助する任務に従事してい 生 |釟三郎らから選挙資金を提供されたものの、 朝鮮から満洲への移民を抑制的かつ統制的に実現しようとするものであった。 その思想に共感していた(金子1952①、 岩手県の南部次郎 狭間 2001、92)) 盛岡県大参事、 (南部姓を禁じられ、一時期、 阿部博行 2005 落選した (八木 1953)。 いずれも宇垣・南系の二宮治重がトップ に王道思想を学び東亜連盟を興し 外務省入りして初代芝罘領事 37-38)° 林内閣 新京にいた金子はその 先に述べたように、 の少数与党であ 正 東政図 確な時 (ひがし なお は 同社 0 わ

本人や漢 た新京実務学校の校長に迎えられた。その後一九四二年の第二一回総選挙 族との共生を促進したりする活動に従事したという (金子 1941、 58-64)° (総選挙) 彼はまた、 で翼賛政治会の公認候補と 満洲 国 0 朝 が

金子はその後、

満洲国協和会副部長として、

満洲における朝鮮人を宣撫して抗日から転向させたり、

朝鮮

が 評し、「この民間志士たる予等や、 臣となり、 支部を創立しようとしたものの、 情報局総裁の了承の下に、松井石根らと諮って、 して岩手二区から当選、 :朝鮮を絶大な混乱に陥れた原因となる」と書きつけている(金子 1958、 真相は不明である。 東条内閣の大日本政治会長となり、 敗戦時には大日本興亜会大陸局長兼実践局長であった。 金子は、 阿部信行朝鮮総督らによって阻止されたと回顧しているが 軍を信用せず、 参謀本部時代の上司であり宇垣・南系の先輩でもある阿部について、「総理大 朝鮮総督となつては全く見るべきものが無くなつて仕舞つた」と酷 敗戦前に日本人の手で朝鮮独立を実現するべく大日本興亜会朝鮮 総督府の役人達の考え丈で終戦直後の仕事をやろうとしたこと 128)° 金子自身は、 (金子 1958、123-125、 小磯首相と緒方竹虎

うに 陸軍軍人であり、大アジア主義を現地で支え続けた重要な人物でもあった。その金子が、 以上に述べてきたように、 関わったのか。 以下にそれを述べる。 金子定一は、 満洲事変及び満洲国などに深く関わった 「支那」 戦後、 通 朝 総合開発とどのよ 鮮 通 特

## 大アジア主義から総合開発。

来の  $\mathcal{O}$ 戦争によって、 近い考えを持っていたと考えられ、 あらゆ 金子は、 故郷でもある大陸 る海港を綱杭として大陸に接続した、之からは仮面をかなぐり捨てた西力を片手に制御しつ、 日 1鮮同 ソ連と共にイギリスが日本への対立を露わにしてきたことを述べ、「日本は朝鮮を橋梁とし、 .祖論に基づき血縁を中核にアジア諸民族の結合を主張するトゥーラン主義 へ日本列島から帰還し、「アジア人のためのアジア」を回復することを主張した。 満洲国成立を機に、 日本海・東シナ海を一内海」とすることで、 (レヴェント2014) に 日本民族が 大陸 また日 卓 本

0

体当りだ」として、「復興アジアの再建」のため「アジア人のアジア」を出現させることを求めた

(松浦 2010.

470-477、539-542)° 大亜 細 亜協会の雑誌 「大亜 細 亜主 義 に掲載された主張を、 金子は一 九三九年に 日 本民族の

大陸還元』として千倉書房から刊行している。 金子は 満洲において満鮮拓殖会社顧問として朝鮮から満洲 の移住を進め、 その後も満洲国協 和会副 部 長とし

漢民族限りの 満州における朝鮮移民らと漢民族農民との協調を促進する役割を果たした。その一方で金子は、 協和」 を安易に求めることを戒めた。 内地・満洲 ・中国・蒙彊で朝鮮人に対する批判を聞 「大和民族と かされ

克服した村などの例を挙げて、 |賊上り| 金子は彼らを擁護した。 の村や、 満洲北部 満洲の地での反満抗日闘争に疲れ、 の朝鮮人麻薬業者 反論したという (金子 1941、58-64)。 (同時に麻薬患者でもある) 協和会の帰順工作に従って地元農村に編入された 金子の発言は、 で強制移住により帰農させら 宣撫・宣伝を担当する立場と

五族協和」 のために調整することを自らの使命と信じて、金子が活動していたことは確かである。

してのものであるから、そのまま受け取ることはできない。但し、

朝鮮と満洲、

中

国占領地、

蒙彊

内地などを

批判し、 和 目覚めて来たことの証左として歓迎し、 る報復の事実を記しながらも、 の結婚式の媒酌をしている。彼は日本人が朝鮮統治時代に朝鮮人に対して行った数々について非難し、 の伸張 敗戦当時の金子の日記を見ても、彼は、 日本人に反省を促した 動の目標としていた。 従軍志願者の増加、 例えば、 愛国運動への参加者増などを、 「日鮮融和」への信念は終始変わっていない (松浦 2010、470-477)。 一方で各植民地における日本人による差別、 一九四五年九月一七日に一時内地に帰る直前に朝鮮人男性と日本人女性と 日鮮同祖論を根拠に、 満洲事変、日中戦争を経て、 朝鮮内、 内地における朝鮮人と日本人との (金子 1958、 横暴、 136-141)° 朝鮮人が日本人として 欧米崇拝などを厳しく 金子は、 朝鮮人によ 国防募 融

時代の上司松井石根が創設した大亜細亜協会の主張を忠実に表現したものでもある。 金子の主張 は 朝鮮農民の満洲移住や、 精神運動、 文化啓蒙活動などを中心としたものであるが、 大亜細亜協会の組織化に 彼 0 参 おい

を託し続け

ても、 るようになったことを示してい 発を提唱した。このことは、 いう側面 言には精 げているように、 という標語を引用しただけでなく、 朝 は 神主義的 鮮支部である朝鮮大亜細 弱 61 金子は、 しかし、 農本主義的 金子は戦後になって、 字垣朝鮮総督時代から始まった「日 金子が、 る 側 亜協会と、 面 が強く、 宇垣 朝鮮・ 総督時代の朝鮮における総合開発の意義について、 それを産業的 朝鮮と向 満洲時代からの 岩手県や日本の復興のために、 かい合う日本海 広 知己である鹿島守之助と共に水力発電による 域的な総合開発プロジェ 本海内海」 側の金沢支部を、 化構想の実践者であった。 宇垣時代の朝鮮における「 クトとして立ち上げ 自らが中心となって立ち上 戦後になって認 当 蒔 0) 心 地 彼 ようと 田 0) 開 開 発

文クラブ』を、 手で宇垣朝鮮総督時代の「心田開発」 て掲げられたことは、 衣替えした(『雑文クラブ』 同人誌」と題する 九四五年一二月に日本に家族と共に帰国して後、 日本・郷土の再建・飛躍のため「心田・政経文化の開發、 『雑文クラブ』を主宰した。そして、一九五二年のサンフランシスコ講和条約発効に伴 極めて注目すべき点である。 四卷八号、 1952.8 の精神修養と水力発電による岩手県総合開発の実現に、 表紙の裏頁)。 公職追放となった金子は、 九六〇年に病没するまで、 独立回復と共に、「開発」という言葉が政治的旗印とし 愛郷社交」を掲げる 金子はこの雑誌を舞台 郷里岩手の花巻で 朝鮮 |開發クラブ| 「岩手社会人の 満洲 時 代 郷里岩 へと 0) 雑 夢

0 的に取り上げた、 地 「心田開発」とは、 球 物理学者でローマ字論者としても有名な田中舘愛橘の 大アジア主 徳川時代の農政家二宮尊徳に始まり、 一義的 な植民地支配 の標語である 金子が朝鮮軍 心田開発第一 (松浦 ₹ 2018, ・で勤務してい 140-141)° 主義」 からも、 金子自身は、 た頃の宇垣 確信を得たようである 朝 郷 里 鮮 総 南 督 が 出 大 身

 $\widehat{\mathbb{R}}$ 

当時、

岩手県は深刻な経済難にあっ

た。

そのため、

県下民間に、

県庁に呼応して恵まれた天然資源を開発

Ĺ

の中

-心であった。

民の 団結力により資本を調達して県の総合開発を行い復興すべきであるという動きがあり、

れた結果、 がこの事務局長を兼任して、東北振興五か年計画を策定、運営した。阿武隈川・田沢湖での水力発電などが開発さ は元商工次官吉野信次。 デルとして、 地 Н 「震による大津波被害などがあって大いに疲弊していたため、政府はアメリカのTVA計画 河川総合開発の主張があった。 東北最大の河川である北上川や岩手県については、手付かずであった。 本 の内地では、 福島県で作られる電力の三分の二が東京に送られる構造ができたという(岡田 2012、 一九三六年五月に国策会社である東北興業株式会社及び東北振興電力株式会社 一九二六年土木学者物部長穂が発表した「河水統制計画」 後者は現東北電力の前身)を設立した。そして、 東北地方では、 世界大恐慌による農村恐慌、 資源論で有名な新官僚松井春生資源 についての論文以来、 東北大飢饉、 一九三三年の昭和三 (初代の総裁及び社長 (一九三三年) 奥村 2012)。 水系 しか をモ 貫管

半の統制経済を次官として取り仕切った革新官僚が、東北出身とは言え、天下り的にトップの座に就いたことに関 人にやらせるがいいでしょう』といったことがある」(東北開発 1990、74)、 ぼするかという値段も知らない。だから計画を立てて、この川はこれだけ電力が出る、これをなんに使うかという みますよ。実際どの現場でいくらのコストで仕上げるかという話になると私では無理です。 こすかという見当をつけるには、 この東北興業並びに東北振興電力のあり方については、批判があった。それは、吉野信次という一九三〇年代前 吉野は後に、「私がこの仕事を引受けるとき商工次官の小川さんにいいました。『電力利用のどんな仕事を起 いくらのコストで仕上げるかということになると見当がつきません。 私もある意味での適任者でしょう。しかしそれくらいの仕事なら半年もたてばす と回顧している。 現業は森矗昶のような 私はセメント一袋なん

「東北振興は岡田内閣の一枚看板也」などと言われて、

政党内閣崩壊後成立した廣田弘毅内閣以

来の

Ě

22

金子の開發クラブはそ

域

で進められ

たが、

行政上の混乱と戦局悪化のうちに中

止される所が多くあ

った。

た新 敏 る総合開発を遂行するためには、 批判を東北人から浴び、 玉 一策の 興財閥 化学研究所 実現としてその壮大な総合開 初代総裁吉野信次も、 などの のである。 民間経営者や、 や森矗昶 化学肥料工 電力開発・肥料など電気化学工業経営・水産・鉱産資源開発・農村工業化などに (森コンツェルン)、 二代目総裁八田嘉明も、 現場をよく 官僚出 業経営を放棄して東北振興事業を縮小 発に期待がかけら 身者の吉野などよりも、 知る技師などの 中野友禮 ń た 年足らずで大臣就任のため (日曹コンツェ (東北開発 1990、 方が適任だったと言えよう。 実地で総合開発的 ルン)、 Ĺ 48-49)° 投資・ 野口 な事業を展開してい .遵 腰かけ的にやめている」 しかしその 助成事業に移行した 日 一窒コン 期待は大きく裏切 ソフェ ルン た大河 東 との 内正 わ 北 た

断された。 修 「建設を北上川に国内で初めて組み入れたいと考えていた内務省が、 計 九三七 画を策定し 戦前、 (昭 和 電 田 力管理法で成立した日本発送電が始めた水力発電開発計画は、 [瀬ダムの建設が始まったという (高橋 1986)。 年雪沢千代治が岩手県知事に就任し開発に力を入れ始めると、 しかし、 戦後の北上五大ダムにつながる北上 戦 争の激化によって、 電力五か年計画に基づいて各地 T Α 成 功 その後工事は  $\hat{O}$ 評 判 Ш 上. 流改 中

ラ<sub>(2</sub>) 開 Ш 発を中 発調査 総合 後になると、 に寄稿して、 開 開発として浮上したこともあって、 心に展開することになった。その特定地域に岩手県の多くが指定され、 審議会が提 クラブ 顧問でもあった岩手県知事 「県民の心 九五 言した河川改訂改修計画から発展した) 一年、 田開発」 第三次吉田茂内閣が国土総合開発法 始 まる総 県ではこの機会を利用して県内の 国 1分謙 合開 吉、 発 0 副 を制定し、 推 知事阿部千一以下、 進を紙 面で訴えた。 (四九年経済安定本部の諮問委員会である T V A (一九三三年) 開発と復興 北上川 県庁では、 例えば、 流域 をモデルとして水資 0 開発が最初 改題され 九 協力を県民に Ŧī. 年 度 0 本 か 開 6 河 發 的 Ш

用した北上

Ш

流

域

0)

電

た岩手県による総合開発貯蓄運動

鉄道網整備

五二年に制定された電源開発促進法を利

月に

一十か年計

画として閣議決定されている

源

開

発などである

(原

1952,

7-8

国

分 1952、

οί

阿部千一 1952、

7-10)°

これを含む岩手県の官民を一体とした働

24

か it の結果、 正式な計画書をいち早く提出した北上特定地域の開発計画は国土総合開発審議会を通過し、 Ŧi.

(阿部千 | 1953 ① 17-19、

② 17-19)°

Į. 沢 T. 事 1 Ш 折しも一九五二年、 「ダム便覧」など。 の 計 を続けて来た地域 島建設)、 石 画 和賀川の湯 鉄道 は、 渕ダム(一 |の鹿島から土木の鹿島へ」)。 岩手・ 雫石川の御所ダム(六七年着工、八一年竣工、 田ダム 九四五年着工、 北上川水系総合開発計画については、 宮城両県に渡る北上特定地域総合開発計画 農林省が直轄した北上川水系滝名川の の農業用ダムとして完成した。 (五三年着工、六四年竣工、 五三年竣工、 一九五〇年の国土開発計画により、 施工西松建設)、 西松建設)、 当時、 東北開発 1990、 「東洋一 鹿島建設 山王海ダム 猿ケ石川の 北上川 (KVA) として再生した。 の土えん堤」を誇ったという · 西松建設) 161-178)° 本流の四 田 (施工鹿島建設) 戦後再開された北上川水系 瀬ダム 干四 は、 (四一年着工、 田ダム(六〇年着工、 その成果である が、 北上 前近代以 五大ダムである 五四年竣工、 (鹿島建設 (日本ダム協 0 水力発 六八年竣 烈な水 ホ 西松

的 を総合的 しようとしたも 興と相俟って狭い乍らも国土を合理的な手段によって総合的に開発利用し又は保全して国力を培い 助 (小川 開發 教授の小川博三は、 合理 クラブでは、 的 に結びつけ、 に 達 また、 成すべきであると論じた の」であると述べ、「総合」ということの意義を強調した。そして、 その機関誌上におい こうした事業を「総合開発の標本的な形体をとっている日本唯 土地・水資源 岩手県企画課長の佐 ・海岸資源・観光資源・ て、 (佐々木 1952、 、々木軍四郎は総合開発について、「日本の産業経済再建のため 県民に対する総合開発の啓蒙宣伝に努めた。 地下資源の利用と工業化とを、 玉 県 の例」として位置づ 例えば、 総合開 地 X 岩手大学工学部 等各地 自立経済を達成 発を通じて科学 貿 0 け 問 0 た 題

なお 開發クラブの政治的 外交的主張は、 敗戦後であるために、 必ずしも大亜細亜主 義のような侵略的 膨 張 例えば、

県の北上

川総合開発

の顧問となった郷古潔

(水沢町出身、

盛岡中学校卒、

元三菱重工業社長。

盛岡

市

ホ

1

る

的 どを論じる記事を多く掲載した 成の なものではなく、 結成され 動きが盛んとなり始めると、 た 『開發クラブ』七巻四号 完全独立 の回復や反共、 (金子 1954 ①②、 在郷軍人会の復活として五四年一月に金子定一を会長とする岩手県 (1954.4)皇室擁護などを訴えるものが主であっ 松見 1954、 は 「愛郷護国号」として、 次第に大っぴらに掲げられ始めたのである。 武藤 1954 など)。 占領改革批判や 占領期には鳴りを潜めてきた旧 た。 講和 !発効の 左 傾運 翌年 流護国 から 排 同 軍

や大アジア主義者としての主張が、

総合開発の進行と共に、

力の う。 望家を網羅していた。金子が戦前活発に活動していた大亜細亜協会と同じく開發クラブは政党ではないが、 議 挙• 勝、 発などの政策実現を支持し実施を支える政策ネットワークであり、 金 田 市 『開發クラブ』 岩手二区から志賀健次郎、 (育委員選挙・補欠選挙当選の人々) ・枢に会員が浸透し、 議 京助、 開發クラブは、 町議などにも多くの会員を擁していた。会員には、 野村胡堂、 の紙面には、 高良とみなど)、 例えば一九五二年の第二五回衆議院総選挙に岩手一 特定の政策分野においてそのイデオロギ 阿部千 その多彩な顔ぶれが紹介されてい \_ 国家・地方の官僚、 『開發クラブ』 宮城 一区から只野直三郎、 五巻三号、 工業などの地域企業、 政治家のみならず、大学などの教育関係者・ 1952.11, 90) j イデオロギー・  $\dot{o}$ 石川一 実現を図ると共に、 区から田子一民、 区から辻 玉 医師、 分県知事以下、 ネットワークであったと言えよ 政 信 農業組合長などの県下名 の当選 政治権 石川金次郎、 者を出 各市町 力による総 村 L 長、 文化 政治権 野 合開 総選 原 IF.

る 0 中 振 野 興を唱え 「郷古潔」) 九四〇年に社長を退任。 1954 (1) 45-47, 郷古 が ダ ム開発による米穀増産 1953, ② 39-41)° 22) 宇田 日曹コンツェルンを作り宇垣総督時代の朝鮮に進出した中野友禮 元建国大学教授の中 三 1989、 637) 鉱工業工場の誘致、 が岩手県はダムを作り水力発電を大いにすべきであると述べ 山優が日本人の反米感情を指摘して沖縄返還を求め 大船渡港を起点とする海上 運 輸 0 充 (会津出 実 化学工 自身の化 中 7 Ш

運動を論じている

5

0

人脈

であった。

軍人恩給の貧弱さを批判し 1953.5まで、六巻九号、 1953, 4), 辻政! 信が国会議員として時事を論じるコーナーを持ち (大川 1954、22-24)。 1953.9 から七巻四号、 (字垣 1954、14-15)、 いずれも、 1954.4 までほとんどの号に投稿)、 大川 金子が大アジア主義イデオロギーなどを共有してきた戦前か 酒明が米軍占領から独立するため自主的 (『開發クラブ』 戦後参議院議員となった宇垣一 四卷八〇号、 1952.8 から六巻五号、 精神の確立に よる維 成が

こうした中で、 総合開発との関係で特に興味深いのは、 鹿島守之助の存在である。

## 匹 鹿 島守之助における総合開発論と汎アジア主

部 建設ホームページ る有名な建造物には、 るようになり、 を機に知遇を得た長州出身の井上勝鉄道局長とのつながりを得ると、鉄道建設に進出して「鉄道の鹿鳥」と呼ばれ 建設などで名をあげ、 始まり、 卷四号、 [藩出身であったこともあり、 金子と朝鮮でも面識があったと思われる鹿島建設第四代社長の鹿島守之助は、 1953.4 彼は一八四〇 朝鮮 57 の鹿島精一七周忌関係の記事など)。 軌 0 跡、 台湾 鉄道建設、 一八八〇 (天保一一) 年頃から大名屋敷の建築を請け負った。岩吉とその子岩蔵は横浜居留地 西谷 1956、178-187)。 の日 機関誌 月譚ダム、 (明治一三) 台湾の鉄道・水道 『開發クラブ』にも五三年頃からよく登場するようになる 満洲 年から鹿島組の商号を用いるようになった。そして毛利公爵 の満鉄路線敷設や諸施設工事、 ・治水・道路などの建設や満洲で成長した。 鹿島建設の前身である鹿島組は江戸の大工の棟梁鹿島岩吉に 朝鮮の富寧発電所などが 岳父の鹿島 间 後 1姓葛西) (『開發クラブ』六 の鹿 ある 島建設によ 邸 精 Ö の 洋館 が 建 南

一代目の岩蔵には男子がなく、 長女糸子と結婚し婿養子となった精 が、 九一二年に組長を継 いだ。 精 は盛 な

と述べてい

る

(鹿島 強

1954,

島

組

事業には、

政治が必要ですよ」と言って縁談を進めたように

(鹿島 1980、

305)

鹿島組

の土木事業は

来 0)

政治や

忠

想に

V

関心を持っ

てい

た守之助

が鹿島家に入る際、

懇意であ

Ó

た鹿島

組

取 締役

永淵

介

が

鹿

が なっ 圌 たことも記されてい < .中学の同窓であっ あった。 藩士の子で、 (盛岡市ホームページ「鹿島精一」)、 た (鹿島 1980、 その関係で、 父の早逝後住んでいた母の実家の隣に、 312-316)° た板板 (照井 1954、48-52・71)。 精一 垣 征 四郎が は盛岡中学卒業後、 九四七年に亡くなった精 A級戦犯として処刑された後には、 『開發クラブ』にもしばしば鹿島精一についての記事が 岩蔵の援助で東京帝国大学土木工学科を卒業し、 盛岡 が、 • 郷里岩手県や盛岡市に対して抱 関 間 0 郷古潔や鹿島精 工事を請け負っていた鹿島 が 遗族 掲載されてい V 、の援 てい 岩蔵 組 0 た思 助に尽力し 0) 婿 圌 る。 養 11 出 は 子と 深 所

る

ある。 計 東プロ 取り入れたと述べている を人心収攬の道具として使い、 事業に熱心なローマの皇帝や政治家の伝統を引き継ぎ、 館に赴任した鹿島守之助 合開発にも興味を持ち、 官永富守之助を気に入った精一 画に 廰 島組では、 ついても、 シアに 鹿島は、 におけ 三代目社 これらと同じ る内地 九五七年に北海道開 は、 長の 移民政策、 同じく国民の情熱によって推進されたものと考えていた。 (鹿島 1980、 精一にも男子がなかった。 ムッソリー 南部 は、 総合開 アメリカにおけるル その後彼を長女卯女の婿養子として迎えた。 の総合開発を進めて小麦の自給自足のための開拓を劇的に宣伝したというので 288-308)。守之助はムッソリーニ首相による南部開発だけでなく、 発 一発庁長官に就任した際、 0 ニの総合開発に強く興味を引かれる。 カテゴリーとして捉え、 ニュ ーズヴ ムッソリーニも共産主義・社会主義との戦いに土木・ 1 HE. Í |鹿島構想||にイタリアの総合開発のアイディ ル 国民や県民が完遂する情熱を持たなけ トのニュ クからロンドンへ旅する船上 1 道路・水道・大浴場など土木 デ 一九二七年結婚と共にロー そして戦後の岩手県 イール 政策とTVA、 で 知り合っ Ö) ド ń 総 ソ た外交 連 イ マ大使 アを 建設 建築 0) ツ 0

政治と

蔵は業界の中のみならず、 深く結びついていた。 鉄道敷設や植民地空間への事業進出は確かに政治権力との関係を必要とし、 政治家・財界人と深く付き合い、 事業を発展させた。 特に二 一代目

に 義の提唱者であるオーストリアのクーデンホーフ・カレルギー伯爵と親しくなり、(5) を掲げ、 ヨーロッパを主唱し、 した守之助は、 アジア運動と汎ヨーロッパ運動』 アを実現することを夢見始めた。 はよく知られるように 外務省を辞めた。そして一九三〇年浜口雄幸内閣の下での第一七回総選挙に際しては、 兵庫四区から中立で出たが、落選した。その後外交史研究の道に進もうとした守之助であったが、 鹿島守之助が政治に積極的に進出しようとした最大の理由は、 二九年八月、ジュネーブの国際連盟総会に随員として出席した。そこで、フランスのブリアンが汎 ドイツのシュトレーゼマンがこれに賛意を表したのを聞き、自ら汎アジア運動を起こすため (例えば、平川 2008、平川 2011)、ドイツ大使館勤務時代、 を刊行し、二七 一九二四 (大正一三) (昭和二) 年に 年にカレルギーの『パン・ヨーロ 『欧州の現勢とその将来』、二六(大正一五) 彼の汎アジア主義への夢である。 EU統合に連なる汎ヨー 汎ヨーロッパに対応する汎 公約の第一に汎アジア リパー の翻訳を刊行 周囲の 守之助 ッパ主 アジ

る契約 約状況などを驚きと疑問を以て受け止めた東京帝国大学法学博士の守之助から、 土木請負業の地位向上に尽くし、 と科学的管理法の導入、予算統制・経理制度改革などによって近代化した。 鹿島入りした守之助は、古い体質の鹿島組を株式会社組織に改め、大量化・能率化・標準化による施 関係の実態を説明されてまとめられたのが、 鹿島中興の祖と呼ばれるようになった。因みに、 法社会学者川島武宜の名著 また、 官公庁の発注する公共事業に関す 『日本人の法意識』 当時卑しいものと見られ 旧慣が強い土木業界の様 (川島 1967) 工能力強化 々な契

求めで三六年鹿島組に入って取締役となり、三八年に社長に就任した。

守之助の鹿島入り当時、 鹿島組は岳父精一 の下で鉄道工事を中心に堅実第 0) 「守成」をなしつつあったが、 赤

の岩

海道

の総

合開

発

の必要を訴えてい

る

(鹿島

1980,

317-335

西谷

1956,

262-271)

亷

島守之助

には長男昭

が

あったが、

長女伊都子を商工官僚で経済安定本部勤務

0)

渥美健夫と結婚させて渥

登設に迎えた。

果鹿島組は、 字無配や資本金減資など苦しい経営状態で、 0 から軍需 換した。 守之助は会社内部を立て直すと共に、 、建設へと事業の重心を移し、 准 出 の 即ち、 工場 裏に政治権 三九年には朝鮮での請負額トップに躍り出たという へと重点を換え、 土木業界におけるピークを過ぎた鉄道工事から、 力へのどのような働きかけ 四 資源開発のため [○年には満洲鹿島組を独立させ、 満洲事変後における日本帝国の総合開 近代化の波に乗り遅れ があったの の鉱山工事を重視することとしたのである。 か、 詳細 水力発電工事や重工業プラント工事、 は今の (松浦 2010、 朝鮮 た鹿島は、 満洲 所 発 不明である。 400-403)° 他社に大きく水をあけら の植民地進 の流れを俯瞰して事業の方針を転 こうした植 出を積極化した。 建築では、 民地 学校 れて ビ ル その デ 病院 ゚゚゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゙゚゙゙゙゙゙゚゙゙゙゙゙゚゚゙゙゙゙゙゚

この めた。 戦後は、 で当選、 から出馬したが、 ılı こうして会社の 背景には、 などの建設や工事を大量に受注した。 朝鮮戦争が起こると、 先に述べたように、岩手県を中心に北上川水系の山王海ダム建設工事などを受注したのも、 自民党外交調査会副会長に就任した。 占領軍から飛行場や基地の建設などの発注を受けて鹿島を発展させ、 先述したように、 またもや落選した。そして、 経営を安定させた守之助は、 異常な画期を呈した経済の中で、 岳父精 以 五三年には守之助 来 五七年には第一 その後改組された大政翼賛会の 四 の開發クラブ同 (昭和一六) がが 鹿島建設は工場・社員住宅・社屋 次岸信介内閣 第三 人を中心とする岩手県幹部との 年の東條内閣による 回 [参議院通 0) 四七年社名を鹿島建設株式会社と改 北海道開発庁長官として入閣 |常選挙に全国区 調査局長を四三年まで務 「翼賛選挙」 深い から出馬 ・官公庁・ この頃である。 つながり 一再び して第四 8 発 t 電 が あ 所 位 0

打診に応じて取締役として鹿島に入社、 次女ヨシ子は初代経団連会長石川一 主に原子力発電所受注などを担当した 郎 の六男で運輸 ||玉 **] 鉄官僚** 0) 石 (丸山 1965、 川六郎と結 166-168)° 婚 郎 また、

之助 鹿島

0

年第二次中曽根康弘第二次改造内閣で経済企画庁長官となった。 第七回参議院選挙に全国区で自民党から出馬して、七一年第三次佐藤栄作改造内閣の科学技術庁長官となり、 守之助は三女三枝子を国史学者平泉澄の子で外交官の渉と結婚させ、 渥美健夫の子直紀が中曽根の次女と結婚したため 平泉も鹿島建設専務とした。 平泉は、 六五年 八五

中曽根は鹿島家の姻戚となっており、平泉の政治活動は中曽根との関係が取りざたされている。

発へと向かったのである ビルマのバ 治家との姻戚関係を活かしつつ、東日本を中心に「原子力の鹿島」を作り上げたのである。 総合開発のエネルギー資源として着目し、いち早く進出したのが原子力発電であり、 175-177。「なぜ鹿島は原発の建設に強いのか」『週刊東洋経済』2011.12.3)。 鹿島守之助が水力発電に次いで戦後日本の 子力研究所第一 った守之助は、 日本で原子力発電推進に最も深く関わった首相は、 植民 泊、 平泉の経企庁長官在職時に着工された高速増殖炉「もんじゅ」の施工も、 女川など日本で建築された原子力発電所の半数近くを受注したのも、 地 ル 開 1 発から引き揚げた鹿島の総合開発の目は、 号機建設に着手し、 原発建設に新たな道を求めた。そして社内の反対を押し切って五三年日本初の原子炉である日 チャン発電所建設にも着手し 五七年に完成した。これは、守之助の国政進出及び国務大臣就任と軌を一にし (五四年)、 田中角栄と中曽根である。 海外進出を始めた まず北海道開発に向けられ、 (鹿島建設ホームページ そのうち中曽根との 鹿島建設であった 鹿島建設が請け負った。 鹿島は、 原子力発電と東南アジ なお、 自らの国政関与や政 この頃 「沿革」 姻 <sub>山</sub> 戚関係を持 岡 昭 福島 鹿 ア開 和初 島は

地位を不動のものとした。ビルマ・シンガポー ク関連工事など国内交通網整備の工事も担当し、 開発の新たな形態である臨海工業地帯建設にお 火力発電所建設を請け負い、 ル 東海道新幹線、 フィリピン・インドネシアなど東南アジアや中東・ スーパーゼネコンと呼ばれる業界トップ五 高速道路一・三号線、 r V いても、 鹿島は大型ドックや鉄鋼 東京 羽田モノレー 火力 南米地域で 油 角の

史」「建設分野への Ŕ Ź 発 電 所 積極進出」・「国際化への対応」、 . |\* ックなどの総合開発型ブロ 丸山 ジェクト建設を受注 1965, 164-168)° L してい る 鹿 島建設 ホー 4 ペ 1 ジ 鹿

島

0

歴

対し、 中 体として、大英帝国・ が、 ある。 中心に独立と平 成するしかないという構想であった。 て、 にここで面識があったはずである。 合開発の構想 東 以上、 鹿 しか 島守之助 ソ連の 548-553)° 近東の 守之助 鹿島 :し彼 民間 共産主義と英米両国 題 口 0 は が、 0 建設による政治を通じた総合開 |教諸 -和を確立するための汎 汎アジアとは、 汎アジア構想は、 大亜細 0) その後鹿島組に入社した守之助は、 クー 解決や資源開 玉 「の独立・ ソビエト 亜協会の会員であり、 デンホー 解放運動に巻き込まれることには 0 ・フ・ 拓に役立つ日本・満洲国 連邦・汎アメリ クーデンホー 大亜細 「資本主義的略奪」とに対抗するためには、 守之助の思想経歴からすれば、 カレルギー しかし彼は、 アジアの 亜協会の ラ・ 協会理 発 ノモデ ź の汎 他 の事業展開を簡単に紹介したが、 カレル 大亜細亜協会の他のメンバ 汎ヨー 日日 のメンバ 事であっ ルと考えてい 内 地 グギー ・ロッ 中 ロッパ・ 朝鮮・ ۱۹ 国 が、 1 た国史学者で、 に対応した汎アジアの構想と不可分であったことで のみの地域 の大アジア主義とは、大きくずれたもの 国家と国際連盟との間に組織すべき中 たのは、 「余りに精神的にして余りに非政治的」 台湾 極東アジアの五つと考えていることを前 大亜細亜協会に入ることは自然な流 満洲 の汎アジアを主張してい 7 後に婿となる平泉渉の父澄とも、 ゚メリ 国 ーと異なり、 日本と中国とから成る汎アジアを結 K 力 わたる資源開 重要なことは、 0 Ŧ ン 口 インドや東南アジア、 1 主義であっ 発 鹿 発電 島守之助 であ H 間 れであ 崩 として反 た 的 I Ó 両 提とし 玉 (松浦 家団 った すで 国 0)

しかもアメリ

カの

直

一接的

義は

H

本に隣接する北東アジアを除外し、

南アジア・

東南アジアに対象を限定するものであり、

中心として英米との

対立を強調するものであったが、

岸信介ら

の推進しようとした戦後日本のアジア主

移民などの総合

開発を推

進す

お

保城広至がい

みじくも指摘したように、

戦

前

戦時の

大アジア主

義は

中

一国と朝

鮮半島とい

· う 北

T

成を変化させて行ったのかという興味深い問題の検討は、

今後の課題としたい。

細亜主義 ア中心の大亜細亜主義を唱えた鹿島守之助にも当てはまる。 関与は排除しつつもその資金を当てにするものであった(保城2008、 から、 戦後の岩手県や北海道の総合開発論、 さらに東南アジア、 彼の汎アジア論における「空間設計」 24-29, 中近東、 303-316)。 この 南米へと及ぶにつれて、 構図は、 が、 戦前 戦前 北 どう構 東アジ の 大亜

# 五 日本近現代史における「総合開発」の意味

を、 デオロギー的要素も、 金子定一と鹿島守之助を例に見てきたように、 [内の資源・エネルギー開発、 有機的に結びつけて設計するものであった。反英運動や日本帝国の優越意識、「心田開発」などの精神的 それらと結びついていた。 重工業コンビナート(兵站基地) 戦前から戦後にかけての総合開発論は、 建設、 帝国内の移民・労働力移動といったもの 朝鮮 満洲を中心とする ィ

されるだろうか。 このような総合開発論を、 日本近現代の国家による 「空間設計」 の時間軸の中で位置づけると、 どのように整理

#### 【近代以前】

結 降の総合開発といった広域的な開発はほとんど見られなかったと言ってよい。 Š 前近代、 海に面し北前船の入港する日本海側や、「東北」は、「米どころ」が多く、 日 本列島には京・大坂・江戸と性格の異なる「三都」 があり、 諸藩 物産流通の豊かな地域であった。 日本列島と中国大陸や朝鮮半島とを !の中心も各地で栄えてい 近代以

#### 【明治期】

は横浜 は、 冷害などによる凶作もあり「後進地域」とされたのである 命 指す明治政府が首都を置いた東京を中心とする「表日本」に優先的に鉄道が敷設され、 (米)、そして電力が、 た会津藩を含む の完成した一 しかし、 新潟を含めた日 大阪 幕末における奥羽越列藩同盟が薩長を中心とする「官軍」に討伐された戊辰戦争以降、 九一 神戸・名古屋など太平洋側に偏り、 「白河以北」 0 本海 「裏日本」や東北から東京へと流れていくシステムができた。一九○○ (明治四三) 側地域について「裏日本」という観念が成立し、 は 「一山百文」とされ、 年頃には、 東北地方は稲作中心の農業地域として固定化され、 工場 「賊軍」 師団 (阿部恒久 1997、 ・高等教育機関も同様であった。 側の東北・新潟地方は冷遇された。 山陰地方などもこれに加 古厩 1997′ 佐藤 2005、 汽船の立ち寄る外国貿易港 (明治三三) カネ・ 岡田 雄藩 雪害や度重なる わっ 「西洋化 ヒト の一つであ 年頃に 産 モノ

### 【満洲事変以降

資源 代わって朝鮮 の電 ッ 変と満 エ その後北陸地方では、 源 ル 重化学工業・電力・移民などによる総合開発の基地の一つとなったのである。三井・三菱などの既成 洲 開 発の 玉 新潟柏崎に農村工業を展開した理研コンツェルン、 建 結果、 国によって、 満洲に進出 第一次世界大戦頃に、 日露戦争後の明治末から大正にかけて鉄道や港湾がようやく整備され、 「裏日本」 「した新興財閥 (環日本海) のうち、 日本曹達などによる重化学工業が勃興する が 第 日本海湖水化構想を通じて朝鮮 次世界大戦期に富山・ 金沢出身で大学卒業後福島県郡山絹糸紡 新潟で重工業工場を展開 満洲と密接に結びつけ (古厩 1997)。 富 山 そして満洲 した日 新潟などで 財 6 閥に 0 コ

総

満洲事変以

٤

日

一本海湖水化構想は、

裏日本」

出身企業による

「逆襲」

であったと言えるかも知れない。

口遵が

始めた日窒コンツェ

ルンなどの

顏

Š

n

後、見

師長として水力発電に取り組むことからキャリアを始

北

振興第

期総合計画を策定して北上川上流のダム開発を始めたが、

戦争によって停滞した。

合開発を進める大陸や半島との関係が殊に強化されてから、 日本列島では 「内海」となる日本海を背負って大陸

半島と接する「裏日本」の比重が再び高まったのである。

調査会の諮問を受けて、 ける総合開発プロジェクトからも地理的に外れていた。 東北地方は 一九三一・三四年と大凶作が続いて深刻な不況に苦しみ、 T A河川総合開発をモデルとする東北興業及び東北振興電力の二特殊会社を設立 金子定一に関する節で少し触れたように、 満洲事変以降浮上した環 政府は東北 沿日本 海 振 13 興 お

### 【「大東亜戦争」期】

地区、 あると結 弁証法的に総合する国防的産業立地に基き、 経験を活かそうとしたフランスの南部中心の国営工廠建設、 られていた。 有機的計画である」ことの必要である(坂入1942、7)。当時、 例えば、 影の工場」 戦時中、 その上で日本については、 ルーズヴェルトのTVAを始めとする軍需工業自給圏、 「大東亜戦争」 論づけてい 国防国家確立のための国土計画は、 計画、 同書はまず、そうした国防的産業立地計画の例として、 ファシスト・イタリアの国土開発事業、 る 開戦直後に刊行された坂入長太郎『東亜産業立地の研究』で強調されたのも、 同 7-11, 海洋圏と大陸圏という二つの 242-253, 325-326)° 自由資本主義を統制する大東亜国 大東亜新秩序ないし大東亜共栄圏の産業立地論として論じら 第一次世界大戦で重要工業地帯をドイツに占領され 相反する方向性を持つ地政学的空間を相 蒋介石政権の分散された奥地工業化などを、 世界でこのような総合的で有機的な国土計画 ナチス・ドイツの欧州広域圏建設構想、 ソ連のウラルやシベリアにおける総合的 防的国 王計 一画を早期に建てるべきで 互 国 イギリス 介的 防 検討し が論 的には かつ 工 0 業

かし同書を精読しても、

どのようにしたら、

具体的に海洋圏と大陸圏という相矛盾した方向性を統合し、

取される。

等を一定の土地に割つて、 指導しなければならないと何度も強調している点である 業・文化を配分して、 国による n た国 満 洲 力の中で 「空間 台湾 設計 など植民地 一大東亜 産業地帯 は 的 明らかに失敗した。 且一定の土地に付て積極的な工作を行ふ事の計画及実行」と規定し、 出 国 防 先 Ó )結成、 を実現することができるの 北進と南進、 交通機関整備、 しかし注目すべきは 海洋と大陸、 農地 (同、61-71)。 か、 開 相反する方向性の統合に、「大東亜戦争」 拓 につい 動 同 力開発などすべてを総合的 書 ての明確な回答は見つからない が国 一土計画について、 「産業、 国家が、 有機 期 的 人 に統 人口 0 内  $\Box$ 日 地 文化 本帝 と朝

11.1 12)° 学者の大野信三の弟子で、金融制度史・財政史などを専攻した経済学者である。 と不可分の 法政大学から博士号を得た、 玉 0 同 付 財 森は、 書を著した坂入長太郎は、 政 神戸 形 経済制 東大経済学部やジョン・ 大学経済経営研究所新聞記事文庫 で総合開発が世界的に論じられており、 度の設計に関与した陸軍主計少将であった森武夫の強い影響を受けて書かれている 陸軍きっての理論派将校であった(「陸軍現役将校が経済学博士に」 戦前から戦後にかけて中央大学・明治大学・ ホプキンズ大学などで学び、 ・人物伝記 日 1本軍部 (5-042))° のエ 英米など各国の戦時統制経済につい ij 九三〇年代、 ĺ ト主計将校がこれらを学んでいたことが 創価大学などで教鞭をとっ 自序にあるように、 戦 時 体制 整備 0 た 蒔 同 8 事 新 7 . 書は た理 0 (坂入 1942 報 0) 研究で 論 1933 満洲 画 済

#### 【敗戦後】

たたまれた 「大東亜 153)° 戦 争 (浅野 2004、 九四六年段階で空襲により東京などの都市の人口 敗戦により、 273-315)° 大陸 また日 半島と日本列 本列島では 、島との紐帯は切断され、 時 期 地 が三〇年の八割弱に減少する一 方、 農村、 農業が 日本帝国 は日 中 央から「自立」 |本列 島 方、 へと縮小して折 戦時 した 疎 開 P 複

員などの結果、

東北六県の人口

は概ね二割上昇した

川内

2015

83)°

敗戦後しばらく、

開

発が期待されたのである

開発だけで復興を行う必要が生じた。このため、 貨不足という制約条件の下で、 大々的に導入したり、 対外輸出を行って外貨を稼いだりすることを許されず、 水力発電という国内資源を利用できる「遅れた」「未開発地域」 帝国の解体に伴う大量の復員による人口急増の受け皿として、 またその能力もなかったため、 である東北 地方の 国内 外

東 が の夢敗れ郷 源 合 北開発促 開 施政方針演 農林産 発法が施行され、 九四六年東北六県の組織する東北産業開発調査会、 (里岩手県に戻った金子定一の岩手における総合開発再生への動きは、正にこうした流れの中に位置 進計 鉱産などの資源開発と資源立地型の産業開発を結び付ける方式がとられた。 説の中で東北開発推進に言及し、 画が閣議決定された(岩本 1994、141-152、 五一年には阿仁田沢・最上・北上・只見が第一次の特定地 五七年東北開発三法が制定され、 四七年東北六県自治協議会が設置され、 松本 2015、 16-17 Ш 内 2015、 五八年には一〇カ年計 域 総合開 67-100)° 発計 九五 画に指 五〇年には 五年鳩 大陸 の総合開発 画か Ш 定され 郎首 5 玉 成る づ 士. 相 電

### 【高度経済成長期】

設備投資と技術革新の時代を迎えた とするアメリ として位置づけたためである。 軍事化・経済小国化を基本としたアメリ しかし一九五〇年代半ば頃から、 カの 政 策転換が行われ、 四八年三月のジョンストン・レポートに見られるように日本経済再建を最優先課題 日本列島の比重は再び太平洋側に大きく傾くこととなった。 (岩三 1997、135-139)。 さらに五○年朝鮮戦争が起こると、 かの占 領政策が、 四八年の冷戦開始と共に、 五一年にサンフランシスコ講和条約が締結され翌年発 日本は特需に沸き外貨が蓄積され 日本を極東における 日本への懲罰 始 いや非 め

から

日本は資本を海外

 $248-260 \cdot 287-334 \cdot 339-342)$ 

こうした中、

六〇年の所得倍

増計

画

0

開始、

六二年

-の全国

.総合開

発計

画

全総

0

閣

意決定に見られるように、

効 日米安全保障条約 の下で日本にアメリ カ 市 場が 開 放されると、 Ŧi. ○年代後半 ・の高度経済成長が 2始まっ た 松松

浦

2017②,

349)°

Ш は、 13 13 済を支える基幹産業であった。 1997、98-101、小堀 2010、 おいて「油主炭従 おけるエネルギー革命によって、 これら日米関係の転換に加え、 炭が重要な役割を果たし、 エネルギー ・革命とスーパータンカーと呼ばれる大型タンカーの 政策が決定的となり、 序章・4章・5章、 工業 傾斜生産方式の下で筑豊・空知・常磐などの産炭地が栄えたものの、 日 石炭から石油 本列 鉄道・ 島の 都 エネルギー供給に占める水力発電の比重も大きく低下してい 経済成長の重心を再び 小堀 2017)。 市では石炭が最 への転換が急速に進展した。 大のエネルギー源として使わ 開発とである。 アメリ カ側 五八年の第四 の対岸である太平洋 一九五〇年頃の農村では れ、 次電力設備 石炭産業が 側 Ŧi. 、と移 近代化 ○年代後半 · 自 した た 日 本経 音 の 画

を開始し、 共に安価に大量に輸送できるようになると、 けすることができる臨海工業地帯構想は存在した。しかし、 るなど、 輸入港湾の整備や臨海埋 重化学コンビナートが、 トに費用対効果で負け、 九三〇年代にも、 太平洋ベ Ŧi. 九年には横 ル 1 鈴木雅次ら内務省土木局の港湾技官を中心に、 地帯を中 急速に太平洋岸に整備されるようになった。 浜市 一め立ても、 顧みられることはなかった(小堀2012、  $\dot{o}$ 根岸湾が埋立てられ 心とした高度経済成 盛んに行われた。 自由に立地できる輸入資源である原油を精製する製油所を中心とする 長 日 五七年旧 本石 0 枠 朝鮮・満洲を中心とする「日本海内海化」 :組み作 油 精製根岸精油 海軍燃料廠跡に作られた出光興産徳山 , 2-30)° ŋ 大型タンカーを受け入れられるような、 海外原材料を利用することができ船舶 が き進めら 然るに、 所 ń 石 五六年以降のタンカ たのである 濵 島播 磨 新潟 小 堀 鐵 製  $\perp$ ĩ プ 油 所 0) D が 所 を横付 が 発達と ジ 進 石油 エ 出 ク す

する動きは埋没した(岩本 1994、153-164、松本 2015、17-18)。 全国レベルでの経済発展や開発ブームが起こると、 東北開発促進法のように東北地方を総合開発の特例としようと

は異なる「基盤移植型」の総合開発の一形態として、一九五〇年代後半に原子力開発も始められた。先に見た鹿島(ロ) 舞台を移して展開する。一方、水力ダム建設など東北・「裏日本」の地形に密着した「資源開 は準賠償などと結びついた形での東南アジアなどでの総合開発への進出という形で、総合開発は国内から海外 一九五〇年代後半にビルマ・フィリピン・インドネシア・ベトナムとの間で結ばれた戦後賠 発 型の総合開発と へと るい

建設の原子力や海外への雄飛の事例は、その典型と言うことができよう。

われ、 新自治体も多く生まれ、 後半から七〇年代には、 移転して来たチッソ水俣工場や新潟県の昭和電工鹿瀬工場 それと共に、高度成長に伴う歪みも顕在化した。太平洋ベルト地帯や、工場誘致により植民地朝鮮の総合開発から 地帯を中心とする全国総合開発計画のような中央集権的システムが作られた。水・電力・労働力の広域的移転が行 こうして一九五○年代後半以降の高度成長の中で、公共投資の傾斜投入と補助金と税制によって、太平洋 過疎と過密の現象が始まり、大きな経済格差が中央地帯とそれ以外とで明確化した(古厩1997、153-164)。 「保守の危機」も叫ばれた。 高度成長の副作用に対する批判を背景に、京都、東京、大阪、 (第二水俣病) などで、公害問題も発生した。 沖縄、 神奈川など全国で革 六〇年代 ルト

## 【七〇一八〇年代――「表日本」中心の経済成長に対する異議申し立て】

二田村 出させていた理化学研究所の大河内正敏を頼って、上京した。大河内に認められた田中はその後理研関連の事業に こうした中、「裏日本」から地域格差に対する異議申し立てを行った政治家が、 (現在の柏崎市) に生まれた田中は一九三四年、 農村工業論を唱えて柏崎にピストンリングなどの工 田中角栄である。 新潟県刈 %を進 羽

満洲を舞台とした総合開発のシステムを学んだと言って良

13

場疎 関 で、 研 なにからを全部、 歳代でしたよ。 ることになる松根宗 (コンツェルンの総帥) 研 わるようになり、 開をやったときのことですよ。 わ ħ あらゆ わ n る工場 が そのころのことで、 理 田中建設にやってもらった」と語っている 一研をやっているときも、 満洲での兵役を終えて田中土建工業を創設すると、 の事業計画と工場設置計画に参画したという はこの当時理 にかわいがられて、 朝鮮の大田というところにひとグループ持って行ったわけだが、 僕はひとつ、 一研ピストンリングにいたが、 r V 理研の建設関係の仕事をしておられたでしょう。 くろい 彼に感心したことがある。 ろな仕事を田中建設にやってもらった。その時分、 (松根 1974、 田中について、「あの方は、 (松浦 2010、 山口県宇部市 86-87)° それは、 403-404)° 戦争中にピストンリングの工 0 い日満 後に財界資源 マグネシウム工場など ですから、その続き 大河内 その 彼はまだ二十 正敏さん 派と呼ば 建 理 n

日 移転するために、 ŋ 建設で資源確 本列島改造論 八河内 九 兀 は、 园 保 年暮れから敗戦間際まで、 自らの工 の必要を理 0) 田 アイディアとなる農村工業化を柏崎 中が 業立地論に基づき、 :朝鮮北部から満洲・朝鮮国境地帯まで飛び回ったという (松浦 2010, 一解し (山岡 2013、32-47)、 軍の命令で王子区神谷から朝鮮の大田へピストンリン 東京近郊や大都市だけでなく農村、 労働者の動かしかたを学ぶなど、 0 理 研 通り」 0) い賑わい に見出だし、 そして朝 大河内をモデルとして、 鮮 日満マグネシウム工 満洲 404)° グの工場設備 と進 田 中 は、 出 後 切を 7 朝 場 ぉ 0

来 Ш こうとした。 た都 備 後田中角栄は、 帰を進 芾 政策 め、 大綱を、 玉 九 四六年 王 朝鮮 開発を推 地 方開  $\dot{o}$ ・満洲で体験した海外進出型ではなく、 衆議院初当選以来、 発に重点を置く形に変えて、 進することで政治基盤を拡大した 住宅 道路・ 七二年自民党総裁選挙を前に日本列島改造論を発 鉄道 (松浦 2010、 内 郵便局などを積極的 .需拡大型の公共事業による経済発展に重 852-854)° また、 に建設 六〇年代に Ĺ 風 水害 耔 備 点を 表 した して

(下村 2011)。

その

中で田中は、

東京など太平洋ベルト地帯など中央都市へ

0

過度の集中を是正する地域格差解

道網の整備などを定めた(古厩 1997、164-167)。 訴えた。そして首相になると、 工業再配置促進法を制定し、 裏日本 • 東北・ 北 海道へ 0) 工業再配置 や全 三国新幹線鉄

開 ど 原発立 る。 見では による巨 からは原子力施設を遠ざけようという反対運動が強く、過疎地の開発と原子力施設建設とをあわせて全国 市 エ ーネル .発に組み込む方向ができていたという指摘もある(住友2013)。 から集めた税金を電力供給のための負担に対して還元するシステムを作り上げた。 こうした中、 日本におけるすべての原子力発電所は、 定期点検などによる雇用の地域経済効果は大きかった ルギー わ 地 原発 額 ゆ 周 革 Ź 0 命 一の総合開発としての産業効果などの経済的波及性は立地自治体の発電所周辺に止まり、 辺自治体には、 歳入があり、 総合開発の一つとして進められたのが、 の担い手として総合開発の要となると見られた原子力発電を地方の過疎地に誘致すると共に、 源三法を制定することにより、 電源三法交付金制度に基づく様々な名目の交付金が流れ込んだ 電源開発促進対策特別会計に基づく立地対策費が投入される上、 海岸部の人口が希薄で自治体の財政力も弱い「 都市の税を原発立地自治体に交付する方向づけを行 「基盤移植型」 (当三 2015)。 原発立地自治体には、 の総合開発である原子力発電 田中角栄は、 すでに六○年頃から、 七四年電源開 雇用のみならず原発税収 僻地」 山川 建設 2015) つた。 に建設され 0) 所 発促進税法な みならず、 0) 但 国 土 水力発 一総合 であ 巻

ではこ が 組閣したり、 H 中 なけれ 'n 第二次 頭には、 以 Ĺ 電 ばならないという考えもあったという キングメーカーとして強い影響力を持ったりした一九七○年代から八○年代にかけてである。 0) 源を確保できず、 右 師である理研の大河内正敏から引き継いだ資源確保や原子力に対する強い 油シ 彐 ッ クも起きている。 またメジャ i 原子力発電 (国際 (山岡 2013、 石油資本) 所が主に各地で建設されたのは、 に多くを押さえられてい 32-35, 57-61)° 実際に、 · る石 関心があり、 九七三年と七 田 中角 油以外にも 栄と中 曾 水力発電 根 自民

電

所の周

辺に重化学工業工場ができたような事例と比べて、

それほど大きくないように思わ

n

る

根に 党の中で原子力開 発四〇年6」 組会長の熊谷太三郎参議院議員がおり、 は 誘致に積 中曽根 朝 派 極的に手を挙げた。 日新聞 0 桜 発やその 内義雄 利用に熱心だった田 (兄乾雄が中国電力会長)、 新潟には田中、 それぞれに原子力発電所建設の受け入れを推進した 中派や中曽根派の中心メンバ 福島には渡辺恒三、 若狭湾に 「原発銀座」 鹿児島には二階堂進ら田 を築い 1 が、 た福井には 「裏日· 本」と東北 (「神話の陰に 中派 工事を受注した熊 0) 政治家 などの過 福島原 疎 島 地

## 【九〇年代以降 新自由主義と大都 市の |反撃

2011.5

び 気の 生んだ一つの要因であった。 て、 てい 方制度改革が行われた。この二つの制度改革が、 第に首都圏などの大都市を中心とした反動が起こるようになった。一九八○年代以降の新自由主義改革とバ 「失われた二○年」と呼ばれる経済低迷の中で、 補助金、 このような一 後 東京・大阪など大都市を中心に起こった行政・ る政治変動に大きな影響を与えているという有力な指摘がある 一九 インフラ整備などの公共事業などによる地域格差是正システムやそれと結びついた政治 九三年自民党政権の崩壊から細川護熙連立政権への移行により、 「地方」 への地域格差是正を掲げた「裏日本」や東北などの「厚遇」に対して、 田中角栄らによって形成された地方や農村に対する地方交付税及 中央地方関係や国政と地方政治との関係など現在の日 財政・ 税制 このあり方に対する異議申し立てが、こうした改革を (砂原 2012) 小選挙区制などの選挙制 砂原 2017)。 九九〇年代以降次 九 システムに対 九 本で起こっ 度改革や地 年以 ブ ノル景 降 0

代 制 表 二〇〇一年に首相となった小泉純 0 解体 の松井 や 二〇一七年衆院選挙を前に、 郎、 愛知県知事の大村秀章、 郎によって行われ それに名古屋市長で地域政党 東京都知事で希望の党代表の た郵政民営化 など旧 小池百合子に、 「減税日本」代表の河村たかしが関 田 中派 の流 大阪 れ を汲 府 知事 む平成 で日 本 究会優位 維 わ 新 0 0) 会 体

「大都市の反撃」の例である。

浮上した

三都

物語

構想などは、

上記の背景の下に生まれた、

財税政における負担軽減を求める新自

## おわりい

中 出 枠組みを反映していることが窺えよう。 東アジアや太平洋を含めたグローバルな環境の中で、「日本」の政治経済をどのように「空間設計」するかという 鈴木善幸 であった。 藩 身の首相が多かった。しかるに、その後は現在まで、父祖の出身や本籍地は別として、東京で育ち東京の小・ 閥 九三〇年代は、 .政府を独占した薩長などの出身でなく東北・「裏日本」出身の首相が多い、 大学を出た、「東京」出身の首相がほとんどである。近代以降現在に至る首相の出自だけをとって見ても、 (岩手)、竹下登(島根)、中曽根康弘(群馬)と、「裏日本」や東北、 戦後の一九七○年代から八○年代にかけても、 斎藤実 (岩手)、 岡田啓介 (福井)、林銑十郎 田中角栄 (石川)、阿部信行 (新潟)、福田赳夫 (群馬)、大平正芳 (香川)、 北関東など、東京ではない「地方」 日本近代史の中では例外 (石川)、米内光政

再編成に使われたのである。「総合開発」は、 九三〇年代に朝鮮・満洲や「日本海」を中心に帝国内で行われた資源立地型及び基盤移植型の する太平洋側とは、 由主義時代という時期区分の中で、日本の日本海側 前近代 そして七○年代から八○年代にかけて、 明治後期以降、 「日本」の「空間設計」をめぐり、どちらに重点を置くか、というバランスを競ってきた。 一九三〇年代、 敗戦後 それを応用した形で、その時々の政治経済における権力バランスの ヒト・モノ(水を含む)・カネ・エネルギーの移動をもたらすと共 一九五〇年代前半まで、高度成長期、 (「裏日本」) 及び東北などと、 首都圏ないし大都市圏を中心と 一九七〇~八〇年代、 「総合開発」は、

由主義

が的な

それのみならず、 ると言えよう。 や経済構造の変容を引き起こす。こうした意味におい やイデオロギーを提供する。そして多くの場合、それは国内政治のみならず周辺諸地域や世界に波及し、 巨大な建造物や多くの人が利用するインフラを建設して大きな経済変動をもたらし、 古代以降の世界における政治権力や経済事象を考える際の、 て、 「総合開発」という枠組みは、 つの有効な「ものさし」となり得 近代以降 人々にアイデンティティ · の 日· 1本を、 権力構造 否

## 〈参考文献〉

阿部千一、

阿部千一、

阿部千一、1952、「県開発 浅野豊美、2004、「折りたたまれた帝国」 期待と朗報」『開發クラブ』 五巻一号、1952 細谷千博・入江昭・大芝亮編 『記憶としてのパール ハ 1 バ ー』ミネルヴァ

一 〇 号

1953.10 1953.11

阿部博行、2005、『石原莞爾――生涯とその時代』上、法政大学出版局阿部恒久、1997、『「裏日本」はいかにつくられたか』日本経済評論社

1953①、「総合開発のありかたについて」『開發クラブ』六巻一1953①、「総合開発のありかたについて」『開發クラブ』六巻一

石井寛治、2012、『帝国主義日本の対外戦略』名古屋大学出版会

宇垣一成、1954、「田村武夫氏の意見に就て」『開發クラブ』七巻二号、195岩本由輝、2009、『東北開発一二〇年』 増補版、刀水書房、旧版は 1994

宇垣一成、1970、角田順校訂『宇垣一成日記 2』みすず書房

宇田 周 Ш 勝 明 1989′ 1954 新維新運動に期待する日本精神の確立」『開發クラブ』七巻三三号、 中野友礼 国史大辞典編集委員会『国史大辞典』 第一〇巻、

尚 田田 知弘、 四千男、 2012 2009、「水力時代 「東北の地域開発の歴史と新たな地域づくり」『社会システム研究』二四号 電力革命の経営史研究」『北海学園大学経営論集』七巻二号

鹿島守之助編著、1966、『クーデンホーフ・カレルギー

小川博三、1952、「日本の水 ――総合開発によせて」『開發クラブ』 五巻三号、

奥村 2012、「東北地方開発の歴史」『都市計画』六一巻二号

『秘録・金子定一の生涯:東アジア風雲の明星』東北史学研

鹿島守之助、1954、「年頭所感 全国開発尖端の岩手からドイツを思う」『開發クラブ』七巻

伝』鹿島研究書出版会(このうちの「クーデンホー

フ・

力

レ

執筆は梶原武

鹿島守之助、1980、『私の履歴書』日本経済新聞社

加 藤聖文、2013、「高碕達之助と戦後日中関係 H 本外交にお がける 政治 から 「経済」 0) 転換 劉傑 Ш 島真編著

『対立と共存の歴史認識 —日中関係15年』東京大学出版会

金子定一、1952 ①、「巨人・石原莞爾」『雑文クラブ』四巻八号、1952.8 金子定一、1941、「半島人の美点と短所」満洲移住協会『開拓』 五卷四号

金子定一、1952②、 「旧悪の真相」『開發クラブ』 五巻四号、1952.12

金子定一、1954①、 「国を亡ぼすものは誰か」『開發クラブ』七巻四号、1954.4

金子定一、1954②、 「『国』『国民』という心構え」同右

金子定一、1954 ③、「軍事裁判」「憲兵」『開發クラブ』七巻五号、1954.5

金子定一、1958、『金子定一集第一 東北太平記の梗概と原註私註 在鮮終戦日記抄』 金子定一全集刊行会

金子定一、1959、 『金子定一集第二 甲子革令政変記』金子定一全集刊行会

金子定一、1967、 啄木の思ひ出 その少年時代を中心に」岩城之徳編 『回想の石川啄木』八木書店

河上 1998′ 「東北地方における地域開発」『地理学評論』七一巻五号 「人口問 題と東北 松本武祝編著 『東北地方「開発」の系譜

川島武宜、 1967′ 『日本人の法意識』 岩波書店

河村雅美、

2006 「ダム建設という 『開発パッケージ』」 町村敬志編 『開発の )時間 開 発の空間 佐久間 ダムと地域社会の

明石書·

世 紀 東京大学出版会

許 哲娜、 一日本 ″興亜 ″ 旗号下的反英美運動 (一九三七— 九四五)」 『東北亜学刊』 \_\_ 一五年九月第五期

久保田豊、 1980′ 「私の履歴書 経済人9』日本経済新聞社

1952 「改題余録」『開發クラブ』四巻一〇号、 1952.10.6 $\widehat{\mathbb{K}}$ は金子定一と思われる。)

潔、 1953′ 「日本面から見た岩手開発」 『開發クラブ』六巻一○号、1953.10

国分謙吉、 1952、「心田開発」『開發クラブ』五巻一号、1952.8

小林英夫、 小林英夫、 1995 ①、『「日本株式会社」を創った男 ―日本株式会社をグランドデザインした男たち』 宮崎正義の生涯』 小学館

小堀 小林英夫、 2005′ 『満州と自民党』 臨海工業地帯の誕生と普及 一新潮社

1995 ②

『超官僚

聡、

2012

小堀 2 第5号 資源小国の近現代』 版会

土木技術者鈴木雅次の軌

跡

九二〇一一九七〇」『ノー

1 ル

クリティ

徳間

店

坂入長太郎、 1942 『東亜産業立 地の )研究] 東洋書館

聡、2017、「エネルギーと経済成長」

中西聡編著

『経済社会の歴史』名古屋大学出

版会

名古屋大学出

小堀

2010′

『日本のエネルギー

-革命

佐々木軍四郎、 1952、「県総合開発とダム」 『開發クラブ』 五巻三号、 1952.11

佐藤健太郎、 2005、「大正期の東北振興運動 ―東北振興会と『東北日本』 主幹浅野源吾 国家学会雑誌

八巻三・四号

下 村太一、2011、 『田中角栄と自民党政治 列島改造への道』有志舎

杉田 砂 10原庸 介、 望、 2017 2012 「大阪 「満州経済人脈 大都市は国家を超えるか』 文芸社 中央公論新社

住友陽文、 砂 原 庸 乔 2013 2017 戦後日本政治史のなかの原発問題 分裂と統合の日本政治 統治機構改革と政党システム 柏崎刈羽原発の誕生とは何だったのか」 の変容』 千倉

竹内祐介、

2017

帝国と植民地経済

中

·西聡編著

『経済社会の歴史』名古屋大学出版会

45

『史創

金ホームページ「日韓歴史共同研究報告書

鄭 照井廣治、 2005′ 1954、「大戦前後の追想 「日帝下朝鮮における国家総力戦体制と朝鮮人の生活 日米の戦争用意 郷古潔氏の出所進退」『開發クラブ』七巻一号、1954.1 『皇国臣民の錬成』を中心に」日韓文化交流基

(第一期)」「第三分科報告書」http://www.jkcf.or.jp/projects/kaigi/history/

東京大学社会科学研究所 first/1-3/ よりダウンロード。2019.2.8 最終閲覧 (東大社研) 編、 1998、『二〇世紀システム4 開発主義 東京大学出 版会

東北開発株式会社社史編集委員会、1990、『五十年の歩み』、東北開発株式会社

戸澤英典、 戸澤英典、2003、「パン・ヨーロッパ運動の憲法体制構想」『阪大法学』五三巻三・四号 2003/2004、「欧州統合とクーデンホーフ・カレルギー」『Human Security』八号

大、2011、「日本帝国と朝鮮人の移動」 蘭信三編 『帝国崩壊とひとの再移動 引揚げ、 送還、 そして残留 勉誠出

和、

2007

思文閣出

の救護活動

朝鮮総督府・

京城帝国大学関係者を中心に」

永島広紀、 2012 『日中戦争から世界戦争へ』 朝鮮半島からの引揚と「日本人世話会」

中野友禮、1954①、「岩手随想 永塚利一、1966、『久保田豊』 田弘編著『大日本帝国の崩壊と引揚・復員』 電気情報社 産業人としての忠告」『開發クラブ』七巻四号、1954.4 慶應義塾大学出版会

中野友禮、1954②、「花巻随想 岩手県を発電県にしたい」『開發クラブ』七巻五号、1954.5

中山 1953、「沖縄に対する米国の態度」 『開發クラブ』六巻一二号、

波形昭 満拓殖株式会社満鮮拓殖株式会社五年史』満鮮拓殖、 一・木村健二・須永徳武監修、 2002、『社史で見る日本経済史 1941 植民地編 第 15 巻 ゆまに書房、 所収、 高見成

西谷弥兵衛、 1956 『鹿島守之助伝』 東洋書館

原

龍

狭間直樹、 2001、「初期アジア主義についての史的考察② 第一 章 曽根俊虎と振亜社」『東亜』 四一一号、2001.9

1952 一総合開発に対する県民の協力態勢 (阿部副知事の嘱に応じて)」『開發クラブ』四巻一○号、1952.10

平 加 均、 2008′ **一鹿島守之助とパン・アジア主義** 名古屋大学大学院 『経済科学』五 Ŧi. 巻四 昘

平 劜 均、 2011′ 関口グローバル研究会編 『鹿島守之助とパン・アジア論へ の 一 試 論

広瀬貞三、 2003 「満州国」における水豊ダム建設」「新潟国際情報大学情報文化学部紀要」

保城広至、 2008′ 『アジア地域主義外交の行方:一九五二―一九六六』 木鐸社

古厩忠夫、

1997

『裏日本』岩波書店

堀 和生、 2004、「日本帝国と植民地関係の歴史的意義 大戦間期の貿易分析を通じて」堀和生 ·中村哲編著 『日本資本

主義と朝鮮・台湾―帝国主義下の経済変動』 京都大学学術出版会

堀 生、 2005′ 「戦間期東アジアにおける工業的分業」中村哲編 『東アジア近代経済 の形成と発展 Н 本評

生、 2009′ 『東アジア資本主義史論〈1〉形成・構造・展開』 ミネルヴァ書房

堀

堀金由美、

2004

「『開発主義』

の系譜

開発独裁, developmental state,

開発主義

明治大学政治経済研

究所

政

経

論社

七三巻一・二号

真木実彦、 大学東北経済研究所 1976、「東北開発政策の展開と昭 『東北経済』六〇号 和四〇年代 東北政・ 財界の東北開発ビジョンと政府 0 東北開発政策 福 島

町村敬志、 2011 『開発主義の構造と心性 戦後日本がダムでみた夢と現 実 御茶の 水書 房

松浦正孝、 松浦正孝、 1995′ 2002 「財界の政治経済史 日中戦争期における経済と政治 ――井上準之助・郷誠之助・池田成彬の時代』東京大学出版会 近衛文麿と池田成彬 東京大学出 版

「『大亜細亜主義』系のアジア主義史料」『日本歴史』七五七号、98-99

松浦正孝、 松浦正孝、

2011

2010

「大東亜

|戦争| はなぜ起きたのか

- 汎アジア主義の政治経済史』名古屋大学出

松浦正孝編著、2013、『アジア主義は何を語るのか 正孝、 2015、「アジア主義」 吉田裕他編 『アジア・ 太平洋戦争辞典』 記憶・権力・価値』ミネルヴァ書房 吉川弘文館

(浦正孝、 2017 ① 「財界人たちの政治とアジア主義 村田省蔵 ・藤山愛一郎・水野成夫」 **『立教法学』** 九五号

村田省蔵と実業アジア主義」

黄自

進

劉建輝

戸部良

編著

松

江浦

**正孝、** 

2017 ②

財界人の戦前と戦後のあいだ

浦

中戦争〉とは何だったのか――複眼的視点』ミネルヴァ書房

松浦正孝、 [日韓歴史家会議 2018、「東アジアの戦争とアジア主義:『大東亜戦争』 報告書「東アジアの平和思想とその実践―歴史的考察」』日韓文化交流基金。 へ向かう日本の対中国政策と対英国政策を中心に」 なお本稿は、この論

文と一部重なるところがある。

松根宗一、1959、「電連を牛耳る男」『実業の世界』1959.7

松根宗一、1974、「三鬼陽之助体当り問答 エネルギー男、石油連盟を叱る」『財界』 1974.3.1

進藤武左エ門・松根宗一・宇佐美省吾「電力事業と松永安左エ門」

『実業の世界』1976.6

松見民夫、1954、 **「岩手県護国同志会結成まで」『開發クラブ』七巻四号、1954.4** 

松根宗一、1976、

松本武祝、2015、 「東北地方『開発』の系譜」同編著『東北地方「開発」の系譜 近代の産業振興政策から東日本大震災

まで』明石書店

丸山邦男、1965、「鹿島守之助 物欲・名誉欲・権勢欲の三冠王」『現代の眼』 六卷五号、

三谷太一郎、 2017 『日本の近代とは何であったか 問題史的考察』岩波書店

三谷太一郎、2018、『近代と現代の間 三谷太一郎対談集』東京大学出版会

宮城大蔵、 2013、「戦後日本とアジア―― 『四つの論理』と『三つのアジア』」 松浦正孝編著 『アジア主義は何を語るのか』

ミネルヴァ書房

武藤貞一、1954、「『日本国憲法』は偽物である」 『開發クラブ』七巻四号、

森 義真、2001、「金子定一」国際啄木学会編『石川啄木事典』おうふう

八木英三、1953、「今村均『戦犯』 金子選挙の昔話」『開發クラブ』六巻四号、

山岡淳一郎、2011、『原発と権力――戦後から辿る支配者の系譜』筑摩書房

山岡淳一郎、2013、『田中角栄の資源戦争』 草思社

川充夫、 2015、 | 高度成長期における東北地方の電源・製造業立地政策 ] 松本武祝編著 東北地方 「開発」 の系譜 明石

書店

吉川 洋、1997、『二〇世紀の日本6 高度成長 ──日本を変えた六○○○日』読売新聞社

山本唯人、2006、「佐久間ダム建設と流域経済圏の変容」町村敬志編 『開発の時間 開発の空間 佐久間ダムと地域社会

の半世紀』東京大学出版会

レヴェント、シナン、2014、『戦前期・戦中期における日本の「ユーラシア政策」 反共運動の視点から』早稲田大学出版部 トゥーラン主義・「回教政策」・ 反ソ

·なぜ鹿島は原発の建設に強いのか」、2011、『週刊東洋経済』六三六三号(二〇一一年一二月三日号)61頁 ウンロード可能。http://toyokeizai.net/articles/-/8183(2019.2.8 最終閲覧 錫俊、2016、『蒋介石の「国際的解決」戦略:一九三七-一九四一 「蒋介石日記」から見る日中戦争の深層」 下記からもダ 東方書店

**〈参照したインターネット〉** 以下、すべて 2019.1.14 最終閲覧。

鹿島建設ホームページ

https://www.kaiima.co.in/prof/overview/160-4 hi鹿島の歴史」「『鉄道の鹿島』から『土木の鹿島』へ」。

「沿革」「昭和初期」。https://www.kajima.co.jp/prof/overview/history-2.html

https://www.kajima.co.jp/prof/overview/160-4.html

同「建築分野へ積極進出」。

https://www.kajima.co.jp/prof/overview/160-5.html

「『スーパーゼネコン』への道」。

同

http://www.kajima.co.jp/prof/overview/160-6.html

同「国際化への対応」。

https://www.kajima.co.jp/prof/overview/160-7.html

http://www.kajima.co.jp/gallery/kiseki

鹿島の軌跡」。

49

国立国立国会図書館ホームページ「近代日本人の肖像」「南部次郎

http://www.ndl.go.jp/portrait/datas/156.html?cat = 11)

高橋秀雄 1986、「北上川治水の歴史と現状」土木学会『水工学に関する夏期研修会講義集』二二回

http://library.jsce.or.jp/jsce/open/00027/1986/22-A05.pdf#search=%27%E9%AB%98%E6%A9%8B%E7%A7%80%E9%

9B%84+%E5%8C%97%E4%B8%8A%E5%B7%9D%E6%B2%BB%E6%B0%B4%27

日本工営ホームページ「日本工営の歴史」「創業者 久保田豊」

https://www.n-koei.co.jp/profile/history/founder

日本ダム協会「ダム便覧」http://www.damnet.or.jp/Dambinran/binran/TopIndex.html

盛岡市ホームページ「もりおかの歴史」「盛岡の先人たち」「第12回:鹿島精一」

「第19回:郷古潔

http://www.city.morioka.iwate.jp/shisei/moriokagaido/rekishi/1009526/1009527/1009546.html http://www.city.morioka.iwate.jp/shisei/moriokagaido/rekishi/1009526/1009629/1009656.html 本稿は、JSPS科研費補助金の課題番号 25380173 及び 18H03625 の助成を受けた研究成果である。JSPS研

路 月二四日)における議論からも、大いに学ぶところがあった。なお、本稿は、国際学術研討会「遇向和解之路:中日戦争 付記 務めた日本政治学会二〇一七年研究大会の分科会「一九四〇年代新秩序構想の中のデモクラシーとヨーロッパ統合」(九 究拠点形成事業「新しい世界史/グローバル・ヒストリー共同研究拠点の構築」の成果でもある。また、筆者が討論者を 八事變後的綜合開發計劃與戰後日本」ができあがった。この漢語論文は、結果的に、日本語オリジナル論文である本稿と ェクトと戦後日本」をもとに、 !再検討」(台湾・中央研究院近代史研究所)において二○一七年九月一四日に報告した「満洲事変後の総合開発プロジ : 中日戰爭的再省思』 稲郷出版社(台湾新北市)、二〇一九年三月刊行予定、のために、梁雯氏に翻訳して頂き、「九一 同名の日本語論文として大幅に加筆修正したものである。これを、 黄自進編 |邁向和解之

許し下さった黄自進先生と立教大学法学会に感謝したい。 同 .時期に刊行される予定であり、 両論文はほぼ (校正段階で修正した箇所を除き) 同内容である。 翻訳との同時刊行をお

- 民地帝国となったのか」へとつながっている。 対談の初出は、 じ文化圏に属していた先進国を植民地化し、それを儒教批判という西洋「文明」によって正当化したことを指摘した(三谷 2018. かつて三谷太一郎は松尾尊兊との対談の第一回 『世界』二○○一年八月号、209-223)。この対談で示された三谷の問題意識は、三谷 2017、第三章「日本はなぜ、 「植民地とは何だったか」において、日本の植民地化の特色を、 かつて儒教文化圏という同 いかにして植 12-30° この
- (2) この五巻一号 (一九五二年八月) であり、『雑文クラブ』から『開發クラブ』への移行に伴う混乱を窺わせる。 は、この後に出た四巻一○号  $\widehat{\underline{\pi}}$ 一年一〇月) の表紙にある注記によると、 巻号が間違っていたとのこと
- (3) 『開發クラブ』の毎年一月号に掲載される賀詞の名簿を参照
- $\widehat{4}$ 鹿島精一の七周忌を扱った五味清吉「故鹿島精一さんの『厚相』」『開發クラブ』六巻五号(一九五三年五月)、81-82 などを参
- 5 クーデンホーフ・カレルギーについては、鹿島 1966 の他、戸澤 2003、戸澤 2003/2004 を参照
- す一例である 山 1965、166-168、『議会制度百年史 行政管理庁長官となるなど活躍した。 性理部長、 鹿島建設四代社長守之助の後は、 一監査役などを務めた塚田十一郎はその後政治家に転身し、連続八回衆院に当選し、第五次吉田内閣において郵政大臣兼自治庁長官兼 五代鹿島卯女、六代渥美健夫、七代石川六郎、八代鹿島昭一である。また、 貴族院・参議院議員名鑑』1990など)。鹿島建設の政界・官界・経済界にめぐらされたネットワークを1 一九六一年新潟県知事となって新潟県総合開発計画を策定し、六八年からは参院議員に三回当選した(丸 守之助に見出されて鹿島建設
- 7 件を題材とし、 題を追及していたジャーナリストが不慮の死を遂げるという結末を辿った(丸山 1965、164-168)。石川達三が書いた小説 め合わせに不正入札を行った金を当てようとしたという疑惑が浮上し、一九六五年には国会で田中彰治議員がこれを追求、首相秘書官とこの間 電源開発が施工した最終最大規模の九頭竜川ダム建設にあたり、三選目の総裁選で鹿島から巨額の借り入れを行った池田勇人首相がその 映画化もされた。 『金環食』はこの
- (8) 本稿でその意味を分析した北上水系総合開発(岩本 1994、125-137 も参照) 設を成功させた高碕達之助については、加藤 2013 を参照 場から開発主義や総合開発を取り上げた研究として、山本唯人 2006、河村 2006、 発を取り上げ、 の副総裁・総裁として満洲国における総合開発にあたり、 朝鮮植民地における電源開発との連続性や大野伴睦・野田卯一、斎藤寿夫静岡県知事ら政治家との関係に触れつつ、 一戦後は電源開発総裁としてアメリカから資本と技術とを導入し佐久間ダム建 同様、佐久間ダム(一九五六年竣工)や静岡県における総合開 町村敬志 2011 がある。また、戦前・戦中期に満洲重工業開発
- 一九六○年代ないし昭和四○年代の東北開発政策を扱ったものとして、 川内 2015、 当三 2015′ 松本 2015 の他、 真木 1975、 河上 1998 など

がある。

(11) 熊谷太三郎は自民党福田派所属と言われ、 (10) 地域開発を「資源開発型」と「基盤移植型」に分けるアイディアは、山川 2015 から得た。但し、 6章)。 九二〇年代の日本の中国への膨張戦略を、「重工業主義」(満鉄路線)と「軽工業主義」(在華紡路線)とに分けている(石井 2012、第5章・第 「資源開発志向型」と、常磐・郡山地域への電機企業誘致や原発・火力発電などの「移植型開発志向」とに分けている。なお、石井寛治は、一 福田赳夫改造内閣で科学技術庁長官(原子力委員会委員長兼務)となった。 山川は、常磐炭鉱・只見電源開発などの